

第1章 | [1986~1999年] 総合サービス企業集団

第1節 事業の多角化と2大プロジェクト

1. 総合サービス企業集団を目指して

◆新たな方向性「総合サービス企業集団」

1986(昭和61)年、相模鉄道(株)は「総合サービス企業集団への途^{みち}」という副題を付した1986年度経営政策を発表した。このあと、1990年代の経営の方向性を決定づけることとなった同政策の主旨は以下のとおりであった。

ソフト化という時代潮流により、サービス産業こそ新しい時代の経済成長をリードする主役となった。相鉄グループ全体が「総合サービス産業」を担う企業集団として成長と繁栄を追求するため、以下を経営基本方針とする。

- ①既存事業の拡大強化と新規事業分野への積極的参入
- ②相鉄グループ各社の自立と連携強化
- ③財務体質の改善強化
- ④効率的事業運営を目指す組織体制の確立と強化
- ⑤社員各自が有する能力の開発とその積極的活用
- ⑥良好なる労使関係の確立・維持



1987年1月に相模鉄道(株)シンボルマークが制定された。社名の頭文字「S」をデザイン化し、中に配された2つの「S」で会社モットーである「セーフティー＆サービス」を表現した

「総合サービス企業集団」のポイントは「総合」である。たとえば、駅を鉄道業の一施設ではなく、“地域の玄関”“サービスセンター”にとらえ、住宅開発や各種サービスと一体化させてハイレベルなサービスを提供する——といった方向性を意味した。

こうした大枠のもと、相模鉄道(株)をはじめ相鉄グループは、総合サービス企業集団を目指すこととなり、グループの最重要拠点である横浜駅西口のさらなる再開発と、グループ各事業を併せて展開できるいずみ野線延伸という2つのビッグプロジェクトを進めながら、新たな事業を展開していくこととなった。

◆川又英雄が相模鉄道(株)会長に、對馬好次郎が社長に就任

1988(昭和63)年1月1日、相模鉄道(株)の川又英雄社長は会長となり、對馬好次郎副社長が社長に就任した。

川又会長の社長就任以来12年弱の間、相模鉄道(株)は沿線の宅地開発やショッピングセンターの展開などを推進し、横浜駅西口駅前再開発事業に着手した。前年1987年12月の相模鉄道(株)創立70周年を経て、相鉄グループは新体制のもと、新たな発展を目指すこととなった。

◆「相鉄グループの経営理念」を集約

1989(平成元)年度経営政策策定にあたり、相模鉄道(株)では、「相鉄グループの経営理念」の改訂を行った。従前のグループ経営理念は、毎年度策定される「経営政策」の基本となる考え方として、1984年度経営政策のなかで提示されていたが、社会のなかで相鉄グループが果たす役割およびグループの不動の理念として、社員に覚

えやすい簡単明瞭な文言にすべきとの考え方から、以下の二文に集約された。

- ①運輸業を中心とする総合サービス産業を通じて、社会的責務を遂行する。
- ②顧客最優先の企業原点を自覚するとともに、時代を先見しつつ誠意あるサービスに努める。

◆グループ会社の上場

「総合サービス企業集団への途」には、相鉄グループ各社が「自立と連携強化」を行っていくことが明記されていた。

1988(昭和63)年8月1日、1986年に東京証券取引所市場第2部に上場していた相鉄ローゼン(株)が、同第1部に上場を果たした。さらに、1991(平成3)年9月26日に相鉄企業(株)が、1996年8月22日に横浜地下街(株)が、それぞれ日本証券業協会に株式の店頭登録を果たした(後にジャスダック証券取引所上場)。

◆横浜熱供給(株)と相鉄ホテル(株)設立

横浜駅西口駅前再開発事業に関しては、これまでの相鉄グループにはなかった新規事業となることから、新会社を設立した。

横浜駅西口周辺施設への熱供給を目的に、1988(昭和63)年4月2日、相模鉄道(株)と東京瓦斯(株)との合弁で、省エネルギーの蒸気・冷水などによる熱供給システムを構築する横浜熱供給(株)を設立した。

続いて同年5月17日には、横浜駅西口駅前再開発事業の中核となるホテルの運営を目的として、相模鉄道(株)が相鉄ホテル(株)を設立した。

◆相鉄ローゼン(株)による会社設立

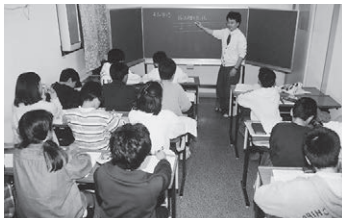
相鉄ローゼン(株)(1982<昭和57>)年8月まで相鉄興業(株)は、顧客ニーズに対応するため、相次いで会社を設立した。1982年6月9日に食料品・衣料品・日用雑貨等の販売を行う(株)相商が、1986年5月28日に薬局を運営する相鉄ドラッグ(株)が、1987年9月30日に宝くじ・テレフォンカード・たばこなどを販売する(株)相販が、1990(平成2)年10月19日にパン製造・販売やレストラン経営などを行う(株)葉山ボンジュールがそれぞれ設立され、相鉄グループの流通業が強化された。

横浜熱供給(株)
1988年4月2日 設立
1998年8月1日 熱供給開始
2003年3月25日
相模鉄道(株)が、東京瓦斯(株)が保有する980株(10%)を取得
(資本金の推移)
1988年4月(設立) 5,000万円
(相模鉄道(株)90%、東京瓦斯(株)10%)
1996年3月(増資) 2億円
1998年3月(増資) 4億9,000万円
相鉄ホテル(株)
1988年5月17日 設立
1998年9月24日
横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズ開業
(資本金の推移)
1988年5月(設立) 4億円
1997年4月(増資) 16億円
1997年12月(増資) 64億円
2000年8月(増資) 84億円
2010年3月(減資) 1億円

(株)相商	(株)相販
1982年6月9日 設立	1987年9月30日 設立
1984年11月	2009年8月1日 (株)相商に合併
家屋修繕サービス、シロアリ駆除などの生活関連サービス開始	(資本金の推移)
1988年8月22日	1987年9月(設立) 3,000万円
本社事務所を横浜市西区北幸二丁目13番5号から横浜市西区北幸二丁目10番27号に移転	(株)葉山ボンジュール
1991年11月15日	1990年10月19日 設立
花卉販売店フルール・モア1号店開店(2007年9月6日にかけて14号店まで開店)	1990年10月31日
2009年8月1日	(株)清新堂からパンの製造販売やレストラン経営などの商標権・営業権を譲受
相鉄フードサービス(株)、(株)相販を合併し、(株)相鉄リテールサービスと商号変更	1991年3月1日
2010年4月1日	(株)葉山ボンジュールを合併
宝くじ販売などを相鉄流通サービス(株)と(株)イストに譲渡	1991年11月15日
(資本金の推移)	「そうてつローゼン大和店」内にベーカリー
1982年6月(設立) 1,000万円	「グランジュール大和店」を開店
1991年9月(増資) 3,000万円	2016年10月19日
	「グランジュール鎌倉深沢店」を「葉山ボンジュール鎌倉深沢店」として開店
	(資本金の推移)
	1990年10月(設立) 3,000万円
	1999年12月(増資) 6,000万円



相鉄ドラッグ南林間店



横浜城南学園の教室風景



日本都市整備株による測量

株パシフィック・コンベンションサービス

1993年12月30日 設立
 2000年3月28日
 相模鉄道株が全株式を取得
 2002年4月1日
 (株)相鉄エージェンシーへ全事業を会社分割
 (資本金の推移)
 1993年12月(設立) 1億円
 (相模鉄道株45%)
 1997年3月(増資) 1億7,725万円
 2000年7月(減資) 1億2,725万円
 2000年8月(減資) 5,000万円
 2002年4月(減資) 4,900万円



山手台住宅地内に開業した相鉄日産



記者会見で大手民鉄入りを発表

***大手民鉄**

東武鉄道・西武鉄道・東京急行電鉄・京浜急行電鉄・京王帝都電鉄(現・京王電鉄)・京成電鉄・小田急電鉄・阪急電鉄・京阪電気鉄道・近畿日本鉄道・阪神電気鉄道・南海電気鉄道・名古屋鉄道・西日本鉄道。

◆新分野での会社設立と取得

さらに「新規事業分野への積極的参入」を図るため、相鉄グループでは、多様化する社会のニーズに対応する会社の取得・設立を積極的に行った。

1989(平成元)年11月20日に警備業務を行う(株)第一相美社と学習塾経営を行う(株)横浜城南学園(1988<昭和63>)年11月1日設立。相模鉄道株(出資比率55%)が、1990年11月5日に土地区画整理や都市計画関係業務、調査測量一般を行う日本都市整備株が、1994年7月1日に店舗賃貸業や飲食店経営を行う横浜駅ビル建物株が、1998年3月30日に飲食店経営を行う(株)大関が相鉄グループ入りし、総合サービス企業集団としてのすそ野を広げていった。

1993年12月20日、会議運営を主な業務とする(株)パシフィック・コンベンションサービスが誕生した。横浜商工会議所を中心とする地元経済界が設立したコンベンション運営会社に相模鉄道株が出資(800株、45%)したもので、横浜駅西口のホテルやみなとみらい21地区のパシフィコ横浜など、大規模会議が開催可能な施設の開業を見据え、コンベンション産業の需要拡大を見込んだためであった。

そのほか、相模鉄道株は日産自動車株との合弁により1992年8月6日に自動車販売店を運営する相鉄日産神奈川販売株(相模鉄道株出資比率60%)を、横浜地下街株は1997年4月25日にダイヤモンドスポーツクラブ「アトラス」を運営する(株)アトラスを、相鉄建設株(現・(株)NB建設)は1998年3月10日に建物の維持修繕事業を行う相鉄リニューアル株をそれぞれ設立した。

なお、(株)横浜城南学園は1996年3月31日に、相鉄日産神奈川販売株は1996年6月30日に、相鉄開発興業株(1967年設立)は1999年11月30日に、それぞれの役割を終えて解散した。

(株)第一相美社

1977年12月14日 設立
 1979年12月5日
 相鉄企業株が全株式を取得
 1989年11月20日 相鉄グループ入り
 1990年6月22日 第一相美株に商号変更
 1991年1月1日
 一般労働者派遣事業認可
 2000年11月1日 有料職業紹介事業認可
 2018年3月31日
 労働者派遣事業を終了
 (資本金の推移)
 1977年12月(設立) 50万円
 1990年4月(増資) 200万円
 1991年4月(増資) 800万円
 1991年6月(増資) 3,200万円
 1998年7月(増資) 4,000万円

(株)大関

1964年11月24日 設立
 1998年3月30日
 横浜地下街株が全株式を取得、相鉄グループ入り
 2006年4月1日
 「きしめん大関」を相鉄流通サービス株に譲渡、「甘味処おりづる」を(株)イストへ譲渡
 2006年8月25日
 相模鉄道株が横浜地下街株より全株式を取得
 (資本金の推移)
 1964年11月(設立) 300万円
 1974年8月(増資) 600万円
 1978年8月(増資) 1,200万円
 1984年9月(増資) 2,400万円

◆大手民鉄の仲間入り

1990(平成2)年5月31日、相模鉄道株は、(社)日本民営鉄道協会理事会において大手民鉄として承認された。

私鉄業界では、1950年代の賃金交渉で大手とそれ以外の区別が生まれ、14社^{*}が大手とされる一方、相模鉄道株は新京成電鉄株や山陽電気鉄道株などとともに準大手民鉄と位置づけられてきた。大手民鉄になると、運賃決定が公共料金を決定する物価問題関係閣僚会議に諮られるほか、一般公聴会への出席、さらには輸送力増強5ヵ年計画の(社)日本民営鉄道協会への提出も必要となるなど、公共交通機関としての責務は重くなるが、社会的信用も大きく向上する。相模鉄道株においては社員のモチベーションアップにつながり、総合サービス企業集団を目指す相鉄グループに

とっても弾みのつく出来事であった。

◆對馬好次郎が相模鉄道(株)会長に、星野正宏が社長に就任

1995(平成7)年1月1日、相模鉄道(株)の對馬好次郎社長が会長に、星野正宏専務取締役が社長に就任した。

對馬会長は社長に就任以来、いずみ野線第2期区間延伸を完了させるとともに、ホテル業への参入を図る横浜駅西口駅前再開発事業を推進した。また1994年10月21日には、第21代横浜商工会議所会頭に就任して、地域の商工業振興にも尽力した。

2. 横浜駅西口駅前再開発事業の推進

◆飛躍の足がかりとして

相模鉄道(株)は1950年代から横浜駅西口を開発してきたが、今後グループがさらに発展するためにも、この地域のより一層の活性化が必要であった。そこで、1980年代後半から1990年代にかけて、グループの業容拡大と新しい象徴づくりにもなる横浜駅西口駅前再開発事業に取り組んだ。

その内容は、旧・相鉄ビルと相鉄映画館ビル(旧・相鉄ムービル)を移転し、その跡地と、隣接する(株)横浜高島屋(現・(株)高島屋横浜店)の駐車場ビル用地を一体化して共同利用し、横浜ベイエリアを一望できるホテルを中心とした複合ビルを建設するというものである。これにより相模鉄道(株)は、国内におけるホテル業に本格的に進出するとともに、この地域に新たな魅力と潤いをもたらすことを目指した。

◆相鉄本社ビルの建設と事務所の移転

横浜駅西口駅前再開発事業に先立ち、相模鉄道(株)は本社を移転するため、1986(昭和61)年10月9日、旧・相鉄ビルの西方約600mの所有地(横浜市西区北幸2-9-14)において相鉄本社ビル(鉄骨鉄筋コンクリート・鉄筋コンクリート造、地上10階・地下1階建、敷地面積2,913㎡、延床面積2万276㎡)の建設に着手した。1988年7月19日に完成し、同年8月8日に本社を移転した。

同ビルには、相模鉄道(株)をはじめ、相鉄ローゼン(株)、相鉄企業(株)、アメリカン・相鉄・コーポレーション、相鉄開発興業(株)、相模鉄道共済組合(現・相鉄共済組合)が入居した。このほか、社員食堂と喫茶コーナー(2010(平成22)年6月30日閉店)が2階に設けられ、個人別に発行されたIDカードにより、利用データをコンピュータに蓄積し、毎月の利用総額を給与から差し引くシステムも導入された。

◆相鉄ムービルなどを移転

相模鉄道(株)は、相鉄映画館ビル(旧・相鉄ムービル)の移転先とするため、1987(昭和62)年6月15日に建設工事に着手し、1988年10月18日、鉄骨鉄筋コンクリート造、地上6階建、敷地面積3,572㎡、延床面積1万3,858㎡の相鉄南幸第2ビル「相鉄ムービル」を完成させた。新しい相鉄ムービルには、相鉄ローゼン(株)が運営する映画館5館(2,202席)のほか、演劇文化を横浜に浸透させる目的で誘致した相鉄本多劇場(2014(平成26)年11月30日に閉館)、ライブハウスやジャズバー、飲食店などが入居した。また、5・6階には、相鉄不動産(株)や(株)相鉄エージェンシー(現・(株)横浜メディアアド)などの事務所が入居した。なお、同ビルでは1991年5月30日に増築工事が完成し、店舗やオフィスが入居した。

一方、相模鉄道(株)は1989年3月15日完成の相鉄南幸第3ビル(鉄骨造、地上2階建、

* (株)横浜高島屋
1995(平成7)年9月1日、(株)高島屋に
合併された。



相鉄本社ビル2階に設けられた社員食堂



新しい「相鉄ムービル」



相鉄本多劇場

延床面積922㎡)を金融機関の移転先としたほか、横浜駅西口駅前再開発工事中の仮店舗用として、1993年5月31日、奈良不動産(株)、(株)庄相、相鉄企業(株)と共同で、南幸共同ビル(現・相鉄南幸第7ビル、鉄骨鉄筋コンクリート造、地上7階・地下1階建、敷地面積604㎡、延床面積2,910㎡)の建設に着手し、1995年3月23日に完成した。



ITTシェラトンコーポレーションとのライセンス契約調印式

横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズ フロア構成(開業時)

- 28階 スカイラウンジ&レストラン
「ベイ・ビュー」、鉄板焼「さがみ」
- 27階・26階 特別客室(タワーズフロア)
- 25階~10階 一般客室
- 9階 従業員食堂
- 8階 日本料理「木の花」、日本庭園
- 7階 シェラトン スポーツクラブ、エステティックサロン、衣裳サロン、カラオケルーム、ホテル事務室
- 6階 美容着付室、神殿、チャペル、写真室、小宴会場「ゆり」「うめ」「らん」「もも」
- 5階 大宴会場「日輪」、ハワイエ、小宴会場「楓」「柏」
- 4階 中宴会場「清流」「浜風」、ハワイエ、宴会受付サロン、小宴会場「葵」「茜」
- 3階 中国料理「彩龍」、バー「ベイ・ウエスト」
- 2階 レストランカフェ「コンパス」、ロビーラウンジ「シーウインド」、ペDESTリアンデッキ
- 1階 車寄せ、ロビー、フロント、メザニンロビー、ホテルショップ、ブティック&ギフトショップ、フラワーショップ
- 地下1階
金融機関、ベストリーショップ「ドーレ」
- 地下2階~地下4階
駐車場(230台収容)
- 地下5階・地下6階
地域冷暖房施設(運営・横浜熱供給(株))



第1エネルギーステーション

◆横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズの開業

横浜駅西口駅前再開発事業は、ホテル棟(相鉄・高島屋共同ビル(現・相鉄ビル))と事務所棟(横浜ファーストビル)を建設し、併せて道路の拡幅、バスターミナルの整備、歩道橋の設置などの周辺整備を行うもので、1994(平成6)年9月27日に着工した。中核となるホテルは、横浜駅西口の都市機能と快適性向上に大きく寄与することが期待された。

ホテル運営に関して、相模鉄道(株)では1995年5月25日、ITTシェラトンコーポレーション(現・マリオット・インターナショナル,Inc.)と業務提携を行い、ホテルの名称を「横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズ」に決定した。鉄骨鉄筋コンクリート・鉄筋コンクリート造、地上27階(呼称28階)・地下6階建、敷地面積5,250㎡、延床面積6万9,550㎡、高さ115mのホテル棟は1998年7月24日に完成、横浜駅西口で一番高い建物となり、相鉄ホテル(株)が運営する形態をとった。

1998年9月24日に開業した横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズは、「タワーズフロア」(26・27階)のエグゼクティブな40室を含む398の客室と、1,000人規模のパーティーが可能な大宴会場をはじめとする11の宴会場、8つのレストランとバー、ホテルショップなどを備え、国際標準のサービスを提供する、横浜駅西口では初の本格的シティホテルとなった。コンセプトは「訪れる全ての人々をあたたかい、さりげないサービスで迎え、もてなし、見送る、横浜西口のオアシス」であった。

同ホテルは開業直後の1998年10月26日に、プロ野球日本シリーズで優勝した横浜ベイスターズ(現・横浜DeNAベイスターズ)の記者会見と祝勝会の会場となったほか、2002年5月31日から6月30日まで開催されたFIFAワールドカップ™ではオフィシャルホテルの一つに指定され、横浜国際総合競技場で行われた決勝戦で準優勝したドイツ代表チームが6月28日から7月1日まで宿泊した。

相鉄・高島屋共同ビルと横浜ファーストビル周辺整備は、1999年度の「第44回神奈川建築コンクール」で一般建築物部門の優秀賞を受賞した。また、2000年6月23日、相模鉄道(株)を含む4社で構成した横浜駅西口駅前再開発協議会(1999年4月に「横浜駅西口駅前特定街区運営協議会」と改組)が、「第18回まちづくり月間建設大臣表彰(まちづくり功労者表彰)」を受賞した。

なお、相模鉄道(株)では1982(昭和57)年4月30日以降、ザ・ホテルヨコハマ(現・ホテルモンテ横浜(横浜市中区山下町))を運営する(株)横浜日航ホテルに資本参加していたが、自社グループによるホテル業への進出を受け、2006年6月19日をもって資本を引き上げた。

◆横浜駅西口での地域冷暖房事業

1996(平成8)年4月30日、横浜熱供給(株)は通商産業省(現・経済産業省)に横浜駅西口地区熱供給事業を申請し、同年5月30日に許可を得て、6月25日に各種工事に着手した。相鉄・高島屋共同ビルの地下5・6階に地域冷暖房プラント「第1エネルギーステーション」を設置し、1998年8月1日に横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズと横浜ファーストビル、横浜市営地下鉄3号線(ブルーライン)横浜駅へ熱供

給を開始した。以後、相鉄ジョイナス、ザ・ダイヤモンド(現・相鉄ジョイナス)、(株)三越横浜店(2005年5月31日まで)、横浜天理ビル、(株)高島屋横浜店にも供給先を拡大し、横浜駅西口の8施設の冷暖房を担った。

◆横浜駅西口での駐車場経営

横浜駅西口駅前再開発事業に併せ、駐車場不足の解消を図るため、横浜地下街(株)が運営する横浜駅西口地下駐車場(地下2階)下の地下3・4階に、新たに駐車場を建設することとなった。

この駐車場の運営のため、1994(平成6)年8月2日、横浜地下街(株)は横浜市、(株)三越(現・(株)三越伊勢丹ホールディングス)、(株)有隣堂と共同で、横浜駅西口駐車場(株)を設立した。地下3・4階駐車場は1998年5月26日に完成し、横浜地下街(株)が従来から運営していた地下2階駐車場(横浜地下街(株)が横浜駅西口駐車場(株)へ賃貸)と合わせ、収容台数1,000台の自走式駐車場として、同年6月1日から営業開始した。横浜地下街第2駐車場(現・横浜駅西口第2駐車場)の運営についても、同日から横浜駅西口駐車場(株)に委託した。横浜駅西口駐車場(株)は同日から相鉄グループ入りしたが、2000年7月13日、安定した経営基盤を確立するため、横浜地下街(株)に合併された。



地下3・4階駐車場竣工のテープカット

横浜駅西口駐車場(株)
 1994年8月2日 設立
 1998年6月1日
 相鉄グループ入り
 2000年7月13日
 横浜地下街(株)に合併
 (資本金の推移)
 1994年8月(設立) 3億円

3. いずみ野線の延伸と沿線の街づくり

◆いずみ野線第2期・第3期区間延伸

相模鉄道(株)は、「いずみ野線は収支の条件が整えば1駅でも延伸する」という方針のもと、1986(昭和61)年8月22日、いずみ中央駅までの第2期区間の建設工事に着手した。

新線建設における基本姿勢は「安全・快適性の追求」と「自然環境の保全」であった。この姿勢は第2期区間においても踏襲され、踏切のない全線高架、60kgロングレールの採用など、周囲の環境に配慮するとともに、保守業務の負荷低減を図る設計が施された。第2期区間建設の総工費は約152億円であった。

1990(平成2)年4月4日にいずみ中央駅が開業し、いずみ野～いずみ中央駅間2.2kmの営業を開始した。いずみ中央駅には相鉄サービスセンター「グリーンぽけっと」やコミュニティホール、多目的トイレ、相鉄線初となるホームエレベーターなどを設置し、地域の交通拠点としての役割に加え、複合的な都市機能をもつ駅とした。駅名の「いずみ中央」は、緑豊かないずみ野線のイメージを継承し、由緒ある地名の「和泉」に、新しい街づくりの核となるべく「中央」を付けて決定されたものである。

1994年2月14日、さらなる利便性の向上を目指し、いずみ中央駅からゆめが丘駅(仮称・下飯田駅)を経て小田急江ノ島線湘南台駅までの3.1kmを延伸する、第3期区間の建設工事に着手した。全区間が高架(2.1km)および地下トンネル(1.0km)で、振動防止と保守業務の負荷低減を図るため、弾性マクラギ直結軌道を採用した。総工費は約476億円であった。

1999年3月10日に第3期区間が開業した。いずみ野線の駅数は7駅、営業キロは11.3kmとなり、他社線と連絡のなかったいずみ野線が小田急江ノ島線に接続したことで、利便性が大きく向上した。また第3期区間開業に先立ち同年2月27日に実施されたダイヤ改正より、快速列車の運行を開始し、湘南台～横浜駅間は約29分で結ばれることになった。なお中間駅の「ゆめが丘」は、横浜市泉区を目指す「やすらぎとうるおいのある街」をイメージし、また横浜市を推進する「いずみ田園文化都



いずみ中央駅開業式



第3期区間建設工事(左の高架橋は一部区間で併走する横浜市営地下鉄)



ゆめが丘駅

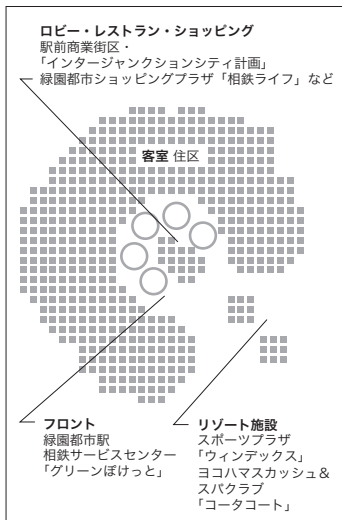
***いづみ田園文化都市構想**

1981年発表の「よこはま21世紀プラン・泉区別計画」のなかで「未来をめざす田園文化都市」が泉区の将来像とされ、1989年のプラン見直しで発表された。①豊かな自然と調和した文化都市、②スポーツと文化の花咲く魅力ある街、③住みよい我が街、④鉄道整備と一体となった計画的な街づくり、の4点が街づくりの目標として挙げられた。



ニールセン橋

ホテルに見立てた街づくり



プレサージュ



サン・ステージ緑園都市・東の街メインエントランス

市構想^{*}の核と位置づけられた同駅周辺における、開業後の「ゆめ」を抱ける街づくりを願って命名したものであった。

第3期区間では駅舎や橋にも意匠が凝らされ、ゆめが丘駅は高架の島式ホームを囲んで扁平な円弧を描く青い鉄骨を並べ、その上に屋根を乗せたユニークな構造で注目を集めた。ホームを囲む鉄骨の一部に壁の代わりにアクリル板をはめ込んで風雨の影響を抑えた未来的デザインは、1999年度の「第44回鉄道建築協会賞」建築作品部門で入賞したほか、2000年6月には「鉄道の日」関東実行委員会から「第4回関東の駅百選」の一つに認定された。相鉄線では、緑園都市駅(1997年10月認定)に続く第2号の認定であった。また、ゆめが丘～いづみ中央駅間で横浜市都市計画道路環状4号線にかかる橋に、曲線を生かしたデザインで周辺景観との調和を図るニールセン橋^{きょう}を、日本の在来鉄道で初めて採用した。

◆緑園都市住宅地における「ホテルに見立てた街づくり」

1987(昭和62)年7月27日に改良工事を完成した緑園都市駅は、「ホテルに見立てた街づくり」をコンセプトにした緑園都市住宅地の開発のなかで、ホテルのフロントにあたる施設であった。客室にあたる住宅は、主に相模鉄道(株)が三井不動産(株)(現・三井不動産レジデンシャル(株))と共同で開発を行った(開発面積約122万㎡、計画戸数4,700戸)。

1986年10月に一戸建て住宅の第1期(敷地面積170㎡～267㎡、延床面積101㎡～151㎡、間取り4LDK～6LDK、価格4,700万円～7,300万円台)を分譲し、1987年に分譲した第2・3・4期も好調に推移した。1988年7月1日からは、敷地面積336㎡～414㎡、延床面積198㎡～249㎡、間取り4LDK～5LDK+2納戸+水屋、価格2億4,500万円～2億9,600万円台という高級戸建住宅「プレサージュ」13戸を分譲、グレード感あふれる街並みを形成した。緑園都市住宅地における一戸建て住宅分譲は2003(平成15)年まで続いた。

一方、集合住宅では1987年5月11日に第1期分譲を開始した高層集合住宅「サン・ステージ緑園都市・西の街」(総面積3万9,900㎡、638戸)は、1988年11月28日までに全6棟・638戸を分譲した。最終分譲となる第4期は、専有面積65㎡～199㎡、間取り2LDK～4LDK+1LDK、価格3,100万円～1億5,400万円台であった。続いて開発した「サン・ステージ緑園都市・東の街」(総面積7万8,400㎡、1,162戸)では、専有面積58㎡～183㎡、間取り2LDK～5LDK+LDK、価格3,300万円～1億9,600万円台のハイグレードな住戸を分譲、1990年5月～2001年3月の10年余りの間に合計11棟を分譲した。広い住棟間には「水の庭」「紅葉の森」「イングリッシュガーデン」などテーマを設けた数々の庭園を配し、住戸内には外出先から電話で室内のスイッチが遠隔操作できるテレコントロールシステムやTVモニター付きインターホン、浴室換気乾燥機などの先進設備も取り入れた。大規模かつ高機能な東西サン・ステージの分譲は、単なる集合住宅の建設の域を超えた、まさに街づくりの名にふさわしい開発であった。

こうした緑園都市の街づくりは高く評価され、特に一戸建て住宅エリアにある幅12mの緑あふれる歩行者専用道路「四季の径^{みち}」は、安全性の確保とともにコミュニティ機能の向上に貢献して、1990年2月6日に横浜市主催の「第3回まちなみ景観賞」を受賞した。

緑園都市住宅地では、住宅分譲に加え、住民の健康増進のための施設も開発された。1988年10月10日、会員制高級スポーツクラブ「ウィンデッキ」(鉄筋コンクリート造、地上2階・地下1階建、延床面積4,575㎡)が緑園都市駅前に誕生した。25m

プール、ゴルフ練習場、アスレチックジム、エアロビクススタジオ、体育館などからなる同クラブは、相模鉄道(株)と三井不動産(株)が所有し、両社が共同出資した緑園都市スポーツ(株)*が、(株)相鉄スポーツに1988年9月1日から2001年3月31日まで運営業務を委託した。なお同クラブは2001年3月31日に営業を廃止し、相模鉄道(株)は同日に三井不動産(株)が所有する土地・建物の共有持分を買い受け、4月1日よりセントラルスポーツ(株)に賃貸した。2005年4月1からは相鉄不動産(株)が本事業を承継している。

◆「インタージャンクションシティ」計画

緑園都市住宅地の「ホテルに見立てた街づくり」のうち、ホテルのアーケードにあたるものが、「インタージャンクションシティ」であった。駅周辺のこの商業地区は、建築家・山本理顕氏の設計により、建物間や内部に通り抜け可能な通路をつくることで、通路が「触手」となってつながっていく建物群であった。

相模鉄道(株)では、計画第1弾となる相鉄・畑緑園都市共同ビル「ジスタス」(鉄筋コンクリート造、地上5階・地下1階建、敷地面積1,011㎡、延床面積2,686㎡)を1992(平成4)年4月23日に完成、1993年1月18日に相鉄・松本緑園都市共同ビル「アーカス」(鉄筋コンクリート・一部鉄骨造、地上3階・地下1階建、敷地面積1,200㎡、延床面積2,997㎡)、2月18日に相鉄・渋谷緑園都市共同ビル「オベリスク」(鉄筋コンクリート造、地上6階建、敷地面積844㎡、延床面積2,518㎡)、11月1日に相鉄・斎藤・雨之宮緑園都市共同ビル「プラード」(鉄筋コンクリート造、地上6階建、敷地面積627㎡、延床面積1,487㎡)が続いた。また、地元地権者による緑園都市畑長治ビル「ロジシア」、緑園都市植松ビル「アムニス」の各ビルも相次いで完成し、それぞれに飲食店や医療機関などが入居、駅前のにぎわいを演出した。またアーカス・ロジシアを除く各ビルの上層階には、職住近接の賃貸住宅が設けられた。インタージャンクションシティ計画は、一体的で新しい街並みの形成が高く評価され、1996年2月13日に横浜市主催の「第6回まちなみ景観賞」を受賞した。

一方、同計画の核となる施設として、相模鉄道(株)は1994年10月7日、スカッシュ&スパクラブ「コートコート」(鉄筋コンクリートおよび鉄骨造、地上4階・地下1階建、敷地面積1,941㎡、延床面積4,229㎡)を完成し、翌8日に営業を開始した。「コートコート」は国内最大級の9面のスカッシュコートと充実したスパ施設を備え、運営は(株)相鉄スポーツが行った。約500名の観戦が可能な透明コートは、日本初の男子世界選手権大会「スーパースカッシュ・イン・ジャパン '94」などの舞台となり、



ウィンデックス

*緑園都市スポーツ(株)

1988年6月20日設立、資本金2,000万円(相模鉄道(株)60%、三井不動産(株)40%)。



ジスタス

*相鉄・斎藤・雨之宮緑園都市共同ビル

1994年3月1日より相鉄・斎藤緑園都市共同ビルと名称変更。



コートコート

インタージャンクションシティ計画図



当時新しい人気スポーツとなっていたスカッシュの日本での中心地として注目を集めた(2006年3月31日閉館)。

◆グループ総合力による緑園都市住宅地の開発

緑園都市住宅地の住宅販売業務を主に担当したのは相鉄不動産(株)であった。同社は、1981(昭和56)年10月15日の一般建設業許可取得以降、総合不動産会社を目指し、宅地建物取引業免許取得(1982年9月27日)、特定建設業許可取得(1987年7月22日)、不動産鑑定業者登録(1988年4月21日)と事業の幅を広げ、営業基盤を強化するとともに、沿線に仲介店舗を設けて顧客や物件の開拓にも努めていた。いずみ野線沿線などの開発事業の進展に伴い、相模鉄道(株)による住宅分譲戸数は飛躍的に増大し、その販売は相鉄不動産(株)を中心として行われた。

1987年4月1日、相模鉄道(株)と相鉄建設(株)が共同運営する相鉄リビング相談所がいずみ野駅前から緑園都市駅西口に移転し、相模鉄道(株)が分譲した住宅のアフターサービスの窓口を担った。また相鉄企業(株)は同日、緑園都市住宅地において地域ぐるみのホームセキュリティシステム「COMFORT 24」の警備業務を開始、24時間体制で監視・警備を行い、安全で快適な暮らしを守る機械警備事業に進出した。

1989(平成元)年5月26日、緑園都市駅前に緑園都市ショッピングプラザ「相鉄ライフ」が開業した。これは、相模鉄道(株)が地元の(有)小川エステートとの共同事業として建設した相鉄緑園都市共同ビル(敷地面積7,505㎡、延床面積計8,436㎡。A棟：鉄筋コンクリート造、地上4階建、延床面積6,810㎡、B棟：鉄骨造、地上2階建、延床面積1,325㎡、C棟：鉄骨造、地上1階建、延床面積133㎡、D棟：鉄骨造、地上1階建、延床面積168㎡)に入居したショッピングセンターで、A棟の「そうてつローゼン緑園都市店」(店舗面積1,511㎡)、B棟の金融機関・医療機関・レストラン、C・D棟の飲食店・ファーストフード店など、計21店で構成された。



相鉄企業(株)緑園事業所

◆山手台住宅地

相模鉄道(株)と三井不動産(株)は、いずみ野線沿線の弥生台住宅地の南東に位置し、土地区画整理事業(1988(昭和63)年1月9日竣工)により開発した「領家・西田地区」を、山手台住宅地(開発面積約87万㎡、計画戸数3,000戸)と名付けて、共同で住宅分譲を行うこととなった。街づくりのテーマは“美しさと安全性”であった。領家地区を山手台サウス、西田地区を山手台ウエストとして、1987年11月7日から一戸建て住宅の分譲を開始した。住宅地内には歩行者専用道路が伸び、^{しんしん}瀟洒な街並みが形づくられた。1991(平成3)年11月20日からは、サウス地区で同住宅地初の集合住宅「ステージ山手台サウス(1番館～3番館)」(専有面積60㎡～110㎡、間取り2LDK～4LDK、価格4,100万円～7,900万円台)を、また翌1992年11月14日からは、ウエスト地区で「ステージ山手台ウエスト(1番館～2番館)」(専有面積55㎡～82㎡、間取り2LDK～4LDK、価格4,300万円～6,400万円台)を分譲した。

同住宅地では次世代住宅の提案も行われた。建築基準法の緩和に先立ち、米国の資材・技術を使用した日本初の木造3階建て集合住宅を建設する日米共同のデモンストレーションプロジェクトに、相模鉄道(株)が事業主として参加。1992年8月27日、サウス地区に日本初の横割型木造3階建て集合住宅「スーパーハウス」(地上3階・地下1階建、敷地面積3,800㎡、27戸)を完成させて国内外の注目を集めた。



山手台住宅地



スーパーハウス

◆緑園南が丘住宅地、みやこガーデン住宅地

緑園都市住宅地と山手台住宅地に続き、1988(昭和63)年9月5日に区画整理組合設立が認可された岡津土地区画整理事業が、1993(平成5)年3月5日に完成し、緑園南が丘住宅地(開発面積約6万㎡、計画戸数260戸)として、1994年6月4日から一戸建て住宅(建築条件付宅地、第1期全12戸、敷地面積197㎡~233㎡、価格5,200万円~6,800万円台)の分譲を開始した。

さらに1991年8月15日に区画整理組合設立が認可された宮古土地区画整理事業(開発面積約8万2,000㎡、計画戸数312戸)が1996年11月15日に完成し、1997年5月から2000年3月まで、ヨーロッパの高原都市をイメージした集合住宅「みやこガーデン」の分譲を行った。みやこガーデンは、同住宅地のメインストリート沿いに並ぶ、「オリーブ館」「メープル館」「マロニエ館」「マグノリア館」「ローリエ館」「クラニア館」「カメラリア館」「リリフローラ館」と植物の名を付けた8棟の集合住宅群で、専有面積66㎡~99㎡、間取り2SLDK~4SLDK、価格2,800万円~5,600万円台、312戸であった。みやこガーデン住宅地では2000年9月から、一戸建て住宅46戸の分譲も行った。



緑園南が丘住宅地



みやこガーデンの街並み

◆レンタル収納スペース開業

いずみ野線沿線では、既存の土地・施設を利用した新たなサービスにも取り組んだ。相模鉄道(株)は2000(平成12)年6月23日、いずみ野~いずみ中央駅間の線路脇にレンタル収納スペース「相鉄いずみ野ものおき屋」(91室)をオープンした。カード式電気錠を使って年中無休で出し入れができ、防犯カメラ警備などのセキュリティシステムが整ったレンタル収納スペースで、住まいを広く使いたいというニーズに応えるものであった。続いて2002年4月27日には、いずみ中央ライフの駐車場内に「いずみ中央ライフものおき屋」(20室)を、2002年12月1日には緑園都市駅付近に「プラスBOX緑園都市」(102室)をそれぞれオープンし、いずれも相鉄不動産販売(株)が運営を受託した。



相鉄いずみ野ものおき屋

第2節 運輸業における新たな取組み

1. 旅客サービスの向上

◆8000系・9000系車両の登場

相鉄線の利用者は、いずみ野線第2期区間の開通も手伝い、1985(昭和60)年度の2億1,100万人から1995年度には2億5,100万人に増加した。

こうしたなかで、1990(平成2)年12月25日に8000系、1993年1月11日には9000系新型車両を導入し、6000系車両などの代替としていった。

8000系車両は、「21世紀にも通用する車両」をコンセプトに設計され、省エネルギーを可能とする大容量のVVVFインバータ制御装置^{*}を備えていた。車体幅は新6000系と同じ2,930mm(6000系・7000系は2,800mm)で、1989年4月20日に新7000系の一部(1編成2両)で採用したセミクロスシート車両を全編成に導入した。これは、クロスシートとドアの両サイドにあるロングシートを合わせ、ロングシート車両より1両の座席定員が6人分多くなっている。また先頭部をシャープにカットし、大型ガラスを用いて開放感を出した外観、イメージを一新する赤と白の都会的なカラーリングが特徴で、旅客サービス設備として3色LED車内案内表示器を導

*VVVFインバータ制御装置

エネルギー効率の高さとともに、加減速時の衝撃が従来よりスムーズで乗り心地がよいのが特徴。既存車両3010系では1987年10月13日にインバータ制御化工事が完成、新7000系には1988年8月29日から一部に導入した。



セミクロスシート車両



9000系車両の車いすスペース



アートギャラリー号



窓上ポスターによる車内展覧会

*旧塗装の新6000系車両

1955年から1970年代まで使用されたグレー・ダークグリーン・赤白帯の塗装を施した新6000系車両。2002年に相模鉄道(株)創立85周年を記念し復活運行していた。

<相鉄線の列車種別>

各駅停車：全駅に停車する。

準急：上りは1957年2月20日、下りは1958年11月20日に運行開始。横浜～希望ヶ丘間は通過、希望ヶ丘以西は各駅停車。1964年4月15日以降は二俣川にも停車。同年11月5日に急行に名称変更した。

おかいもの電車：

1960年11月1日から1964年11月5日まで、買い物客をターゲットに1日1往復、日中に運行した列車。停車駅はのちの急行と同じ。当時、準急は二俣川を通過していたが、これは停車した。

急行：横浜～二俣川間は通過、二俣川～海老名間は各駅停車。運行は本線のみ。1964年11月5日に準急から名称変更して誕生。

快速：横浜、星川、鶴ヶ峰、二俣川といずみ野線内全駅に停車。1999年2月27日の登場時はいずみ野線発着のみ運行、2014年4月27日から本線でも運行開始。本線では二俣川～海老名間は各駅停車。

特急：横浜、二俣川、(本線)大和、海老名、(いずみ野線)いずみ野、湘南台のみに停車。2014年4月27日運行開始。

入した。

9000系車両は、8000系をベースとしており、よりソフトなデザインで前面に大きな曲面ガラスを採用し、ライトグレー塗装に赤白のラインを配した外観、茶色とベージュ系に色分けした床などが特徴。設備面では屋根上に集約分散式冷房装置、車内には相模鉄道(株)初の車いすスペース(1編成2カ所)、乗客が直接乗務員と会話できる非常通報装置も備えていた。

これらの車両を含め、1985年度から2001年度にかけて計270両(7000系10両、新7000系60両、8000系130両、9000系70両)を増備した結果、1990年12月25日に保有稼働客車400両を達成した。

なお8000系車両は1999年度、9000系車両は2001年度まで、並行して導入された。

◆アートギャラリー号の登場

1989(平成元)年3月19日、新6000系の車両全面にイラストを描いたグラフィックカーとして「アートギャラリー号」が登場した。横浜駅乗入れ50周年記念の「ほほえみ号」(1983(昭和58)年12月10日～1991年9月29日運行)、「緑園都市号」(1987年4月12日～2003年11月2日運行)に続くもので、版画家・池田満寿夫氏によるデザインのテーマは「楽園シンフォニー」であった。車内でも窓上ポスターで絵画や写真などの芸術作品を展示するイベントを実施し、車両全体を芸術で包み込むというコンセプトが注目を集めた。

アートギャラリー号は2003年8月20日をもって運行を終了した。なお同年11月2日には緑園都市号と旧塗装の新6000系車両によるさよなら運転が行われ、30年*余り活躍した新6000系車両の最後を飾った。

◆快速列車の運行

いずみ野線第3期区間開業直前の1999(平成11)年2月27日のダイヤ改正から、各駅停車・急行列車に加えて、快速列車の運行を開始した。停車駅は、いずみ野線の各駅と二俣川、鶴ヶ峰、星川、横浜で、湘南台～横浜駅間を直通29分で結んだ。第3期区間の開業に伴い、通勤時間帯などで湘南台～横浜駅間の所要時間を短縮して利用者の便宜を図るとともに、相鉄線初の競合路線(横浜市営地下鉄1号線(ブルーライン)の戸塚～湘南台間。1999年8月29日に開業)の出現に備えて需要喚起を行うこと、さらに急行・二俣川～横浜間の混雑緩和などを狙いとしたものであった。

◆弱冷房車と優先席の設定

相鉄線では1988(昭和63)年6月16日から、冷房を苦手とする利用者のため、一部車両(1編成に1車両)について冷房温度をほかの車両より2℃程度高い27℃に設定した「弱冷房車」の試験運転を開始し、同年8月1日から1編成2車両ずつ本稼働した(2017(平成29)年5月15日から1編成1車両となった)。

また1997年3月10日には、1975年12月15日に設置を開始(8両編成で2カ所、10両編成で3カ所)したシルバーシート(現・優先席)について、全車両(1車両1カ所ずつ)への設置を完了するなど、多様なニーズに対応し、車内をより快適な移動空間とする施策を進めた。

◆駅の改良によるサービス向上

1988(昭和63)年12月24日、駅施設の充実とサービス向上を目的とした三ツ境駅改良工事が完成し、2駅目となる相鉄サービスセンター「グリーンぱけっと」を開

業した。また改札口上部に、縦15cm・横65cmの大型パネルに緑色(通行可)・赤色(通行不可)を表示して乗降客に出入口を案内する「出入口表示機」を相鉄線で初めて設置し、併せて改札口通路を拡幅して、車いすの通行も可能とした。

海老名駅では、利用者の増加に対応するため改良工事に着手し、1989(平成元)年3月29日から使用を開始した。三ツ境駅に続き相鉄サービスセンター「グリーンぼけっと」を開業したほか、改札口通路を拡幅し、車いすの通行も可能とした。小田急線との連絡階段の拡幅、また相鉄線初の試みとして、季節の鉢植えを設置することで駅構内を明るい雰囲気とするため、プランター付き改札口を設置した。

上星川駅では、1993年3月19日、相模鉄道(株)初となる、車いすと一般旅客の同時利用が可能なエスカレーター^{*}4基を新設した。また西谷駅では、1992年9月から、垂直移動施設(エレベーター3基、エスカレーター6基)と多目的トイレを設置する工事を進めていたが、1993年12月14日にすべてを使用開始し、南口と北口のどちらからでも階段を使わずにホームまでアクセスできるようになった。

横浜駅では、1993年9月13日から改良工事に着手した。自動改札機の本格導入、相鉄サービスセンター「グリーンぼけっと」の新設、自動精算機3台の導入、旅客トイレの改良を実施し、1995年1月31日に完成した。

さがみ野駅では、1996年3月に上下線のホーム上屋を39m延伸し、192mとした。

かしわ台駅には本駅舎・東口駅舎の2つの駅舎があるが、後者は1946年3月1日に大塚本町(旧・柏ヶ谷)駅として建てられたもので、老朽化が著しかった。1996年9月9日に東口駅舎の建替工事に着手、1997年3月18日に完成した。この工事はかしわ台駅本駅舎前の跨線橋かけ替え工事と連動して行われ、東口新駅舎は、約5mの高い天井に明り取りの窓を備えた明るいコンコースとなり、駅前広場も整備された。なお同駅ではこれに先立ち、1995年にホーム上屋の延伸工事も実施している(同年3月9日完成)。

1990年代後半になると、公共施設でのバリアフリーが求められるようになり、相模鉄道(株)でも駅の改良に合わせ、垂直移動施設や多目的トイレの設置を進めていった。

1995年3月15日、相模大塚駅にて南口階段とホームに車いす対応のエスカレーター2基と、一般用エスカレーター1基を新設し、使用を開始した。三ツ境駅では、1996年11月から上下線ホームへのエスカレーター各1基の増設工事を開始し、翌1997年3月17日に使用開始した。これにより、同駅ホームのエスカレーターは常時昇り降り両方向の運転が可能となった。

鶴ヶ峰駅では、ラッシュ時の混雑解消のため、上りホームを最大3.7m拡幅して7~9mとし、1997年3月に完成した。

弥生台駅では、開業時(1976年)の14倍に増加した利用者に対応するため、1997年9月1日に建替工事に着手した。新駅舎は面積を約4倍に拡張、駅の南・北側いずれからも利用可能な橋上駅舎とし、1998年9月に完成した。またエスカレーター・エレベーター各2基と多目的トイレを設け、バリアフリー化を図った。

二俣川駅では、1988年10月、4線化工事に伴う駅舎の改良工事を開始した。まずホームの拡幅(最大幅員6.8m→11m)を行うとともに仮駅舎を建設し、その後1994年11月22日から本駅舎建設工事に着手、1999年3月20日に完成した。新駅舎は地上2階・地下1階建てで、エレベーター3基・エスカレーター4基を設置するとともに、地域での利便性に配慮して、駅の南側に横浜方自由通路を設けた。屋上には有料駐車場(33台)を開設し、同年12月14日には拡張工事(104台)を完成させて、愛称「タウン・ガレージ」として12月17日に再開業した(2014年9月30日廃止)。



改札口上部の出入口表示機



プランター付き改札口

***エスカレーターへの車いす乗車**

従来は、いったんエスカレーターの運転を停止させて車いすを載せたあと、車いす専用として運転していたが、新設したエスカレーターは、車いす使用者が乗降するとき低速になるだけで、一般旅客も同時に利用することができた。



かしわ台駅東口新駅舎



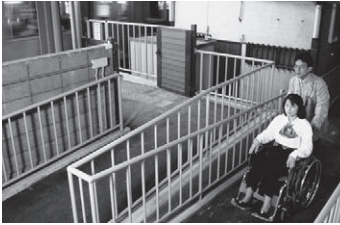
弥生台駅



タウン・ガレージ



希望ヶ丘駅



車いす専用スロープ



緑園都市駅「グリーンぽけっと」

***グリーンぽけっと**

開業日は次のとおり。三ツ境駅：1988年12月24日、海老名駅：1989年3月29日、いづみ中央駅：1990年4月4日(2000年12月閉鎖)、横浜駅：1994年7月20日、大和駅：1994年10月2日、二俣川駅：1999年2月7日、湘南台駅：2001年1月17日。



旅客を案内する案内係



全駅終日禁煙を知らせるポスター

また1999年11月9日には、駅構内に「am/pm相鉄二俣川駅店」を開業し、(株)イストに運営を委託した。相鉄線の駅構内では初となるコンビニエンスストア出店であった。

希望ヶ丘駅では、相対式の上下線ホームの横浜方先端にそれぞれ地上駅舎を設置していたが、1998年6月に改良工事に着手し、2000年3月26日に新駅舎の使用を開始した。新しい駅舎は安全性と利便性の高い橋上駅舎となり、エスカレーター8基や多目的トイレが設置された。外観・コンコースとも茶色をベースとした温かみのあるデザインとなり、ホーム上屋延伸が行われ、構内店舗(コンビニエンスストア、カフェ、宝くじ売場など)が設置された。

1998年10月から進めていた横浜駅冷房化工事は、1999年7月19日に完成した。この工事は、横浜駅周辺の地域冷暖房化に合わせて駅構内コンコースに冷房設備を新設するとともに、熱源切替工事や天井デザインの改良を行ったものであった。従来、新相鉄ビルから熱源供給を受けていたが、横浜熱供給(株)による地域冷暖房システムからの供給に切り替え、1・2階改札口やコンコースを冷房化した。

そのほかにバリアフリー対応として、1992年7月20日には希望ヶ丘駅上りホームに、1996年3月には和田町駅下りホームに、それぞれ車いす専用スロープを設置した。

◆「グリーンぽけっと」と案内係

1987(昭和62)年7月27日に改良工事を終えた緑園都市駅に、初めて登場した相鉄サービスセンター「グリーンぽけっと」は、2001(平成13)年までに三ツ境・海老名・いづみ中央・横浜・大和・二俣川・湘南台駅に設置され、オープンカウンターでは駅業務に加えて取り次ぎ業務・販売業務を行った。また、1994年7月1日には旅客への案内業務を専門に行う案内サービス専任の駅係員(案内係)が二俣川駅に登場、以降、乗降客が多く地理に関する問合せの多い横浜・大和・海老名駅にも配置して、ソフト面でのサービス向上を図った(2013年6月30日廃止)。

◆全駅終日禁煙の実施

1980年代に入ると公共施設や交通機関での禁煙・分煙が進み、1988(昭和63)年には横浜市営地下鉄、1989(平成元年)年には大阪・神戸市営地下鉄で駅構内での禁煙が実施された。

相模鉄道(株)ではこうした流れを受け、1991年5月1日から横浜駅での終日禁煙を実施、1992年8月1日には大手民鉄としては初めて全駅を終日禁煙とした。この時点では各駅ホームに1ヵ所ずつの喫煙所を設けていた(分煙)が、公共施設での受動喫煙防止を定めた健康増進法施行に合わせ、2003年5月1日から全駅を終日全面禁煙とした。

◆プリペイドカードサービスの展開

1985(昭和60)年に日本国有鉄道が「オレンジカード」を発売し、鉄道でのプリペイドカードの利用がスタートした。相模鉄道(株)は1989(平成元年)年3月19日、「相鉄ぽけっとカード」を発売し、同月23日から使用開始した。利用者が全駅に設置されたカード対応型自動券売機で乗車券を購入して乗車するもので、現金を持たずに鉄道を利用することができるようになった。カードは1,000円・2,000円・3,000円の3種類で、車両の写真を配したものなど、さまざまなデザインのカードが折々に発売された。

2000年10月14日からは、関東地区の17の鉄道事業者を中心とした共通乗車カー

ドシステム「パスネット」に加盟し、「SF^{*}ぼけっとカード」を発売した。カードは、1,000円・3,000円・5,000円の3種類で、プリペイドカードを自動改札機に挿入すると乗降駅情報が記録され運賃が差し引かれるもので、異なる会社の路線を乗り継ぐ際の利便性が大きく向上した。パスネットのサービス開始に伴い、SFぼけっとカードの挿入が可能な自動改札機を全駅に順次導入した。さらに2003年3月26日以降、全駅の自動改札機を乗車券やパスネットカードの2枚同時投入が可能な新型自動改札機へ交換した。なお、パスネットのサービス開始に伴い、「相鉄ぼけっとカード」は2000年9月30日に発売を終了し、2015年3月31日に「SFぼけっとカード」とともにすべての取扱いを終了した(払戻しは2018年1月31日まで)。



相鉄ぼけっとカード

***SFぼけっとカード**

SFはストアードフェア(Stored Fare)の略で、カードに蓄積された料金(の情報)を意味する。「パスネット」システムでは磁気カードを用いてストアードフェアを実施した。

◆運賃割引制度の充実

相模鉄道(株)は1991(平成3)年12月1日より、知的障害者に対する運賃割引制度を導入した。これは知的障害者およびその介護者の負担を軽減するため、身体障害者割引と同様の割引を行うものであった。本人が乗車する場合は、相鉄線および連絡運輸区域内の他社線を合わせた鉄道乗車区間が片道通算101km以上の場合、普通運賃の5割引とした。また、介護者と一緒に乗車する場合は、距離にかかわらず、本人・介護者ともに普通・定期・回数乗車券の運賃を5割引とした。

また、1995年9月1日の旅客運賃改定と同時に、割引率が普通回数乗車券より有利な時差回数乗車券「オフピークチケット」(平日10時～16時と土・日・休日・12月30日～1月3日の終日使用可能)と、土・休日割引回数乗車券「サンキューチケット」を発売開始し、多様なニーズに応えた。前者は普通乗車券の10倍の運賃で12枚分、後者は14枚分利用できるもので、有効期間はともに3ヵ月間であった。なお同時に、普通回数券の有効期間も従来の2ヵ月間から3ヵ月間に延長された。

2. 設備改良と安全対策

◆設備の整備による輸送力増強

相模鉄道(株)では、10両編成列車の運行のため、引き続き留置線の確保など諸設備の整備を進めた。1984(昭和59)年に相模大塚駅構内に10両編成の列車が収容できる留置線3本を増設する増線工事が完成し、7月から使用開始した。

1987年8月12日には、将来の運転本数の増加に対応するため、二俣川駅構内4線化工事に着手、1989(平成元)年5月28日から暫定使用を開始した。1990年4月4日のいずみ野線第2期区間の営業開始以降、1991年3月15日には同駅に引上線を新設し、本線の朝のラッシュ時や深夜における増発、いずみ野線の増発を実現した。

1989年度には、厚木駅において、留置線を6本から8本に増設するとともに、各線路を10両編成車両が留置可能な長さにするを目的とした構内改良工事が完成した。また1994年9月にはかしわ台駅構内配線変更工事に着手した。信号所を移設し、留置線2本を増設するとともに、8両編成用の留置線3本を10両編成用に変更した。1999年3月19日に完成し、同駅の留置車両数は184両から210両となった。



二俣川駅構内4線化工事

◆ロングレール化の100%達成

相模鉄道(株)では、1970年代後半から、25mのレールを溶接して継目を減らし、騒音・振動とともに保守管理の軽減につながるロングレール化を推進した。いずみ野線については開業当初から、実施可能な箇所はすべてロングレール化されていたが、本線についても、1989(平成元)年9月20日に100%を達成した。



大和駅周辺連続立体交差工事、深夜の線路切替え



大和駅地下ホームを使用開始

* 鉄道土木構造物の耐震基準

直下型地震が想定に加えられ、中規模地震(震度5程度)では「構造物を損傷させない」、大規模地震(震度6強～7程度)では「早期に機能回復させるため、構造物の被害を軽微な損傷に留める」と定められた。

◆大和駅周辺連続立体交差工事の完成

1986(昭和61)年1月29日から神奈川県・大和市・相模鉄道(株)・小田急電鉄(株)が進めていた大和駅周辺連続立体交差工事は、1993(平成5)年8月1日に相鉄線大和駅で地下ホームの使用を開始するとともに6カ所の踏切を閉鎖した。新駅舎は1994年10月2日に完成し、小田急線と共用の1階コンコースから、相鉄線初の地下ホームとを結ぶエレベーター1基・エスカレーター2基が設置された。また6駅目となる相鉄サービスセンター「グリーンぽけっと」には定期券発売所と大和市広報コーナーが併設された。大和駅周辺連続立体交差工事は1995年3月31日に完成した。

◆地震対策の推進

1995(平成7)年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、山陽新幹線の高架橋が倒壊するなど甚大な被害が発生した。このため、1998年12月25日に鉄道土木構造物の耐震基準が強化され、翌1999年の10月には鉄道構造物等設計基準が定められた。

こうしたなか、相模鉄道(株)では防災体制の強化や鉄道構造物耐震補強工事を開始し、1995年度から緊急措置として高架橋の柱78本に鋼板を、トンネル中柱66本に炭素繊維シートを巻き付けて補強した。さらに、落橋防止のため移動制限装置31連の取付けなども行い、一連の工事は2002年3月までに完了した。また1996年1月17日に防災規則を制定、1998年3月3日には運転司令所(現・運輸司令所)に地震自動通報装置を設置するなど、地震対策を推進している。

◆安全関連設備の充実

このほかにも、利用者の安全・安心を確保するための設備を拡充していった。

1993(平成5)年3月20日、相鉄線初となるホーム転落検知装置をかしわ台駅と南万騎が原駅の下りホーム下に設置した。同装置は旅客が転落すると、線路脇の検知用マットが重みを感じて作動し、乗務員と駅係員に異常を知らせるもので、列車発車時に車掌から全体が見渡しにくい曲線状のホームをもつ両駅に設置された。

一方、テロなどの犯罪行為や構内トラブルを抑止するため、1996年11月1日、横浜駅・二俣川駅・大和駅・海老名駅の4駅に防犯監視カメラを設置した。位置は改札口付近と、駅係員の目が届きにくい旅客トイレ付近で、各駅への設置台数は横浜駅13台、二俣川駅5台、大和駅7台、海老名駅5台であった。このあと、防犯監視カメラは全駅へ展開された。

踏切での事故防止に向けては、1991年3月20日から星川4号・相模国分3号の両踏切で、相鉄線初となる踏切自動障害物検知装置の設置工事を開始、その後も各踏切への設置を進めた。また、見通しの悪い道路と交差する踏切で、遠方からでも警報機が確認しやすいよう、警報灯を道路中央部まで張り出させるオーバーハング化を進めるなど(2018年3月末日時点19カ所)、踏切の安全性向上に努めた。

一方、1995年4月20日から、運転司令所にITC(総合列車運行管理装置)訓練システムを導入した。これにより、従来は運転終了後の深夜にしか行えなかった運転司令の操作盤模擬訓練をいつでも行えるようになり、さまざまな異常時を想定した訓練が実施可能となった。

◆電気関連設備の増強

相鉄線の輸送力増強には電力の安定供給が必須であった。そこで変電所の増設が進められた。



踏切自動障害物検知装置

相鉄線6番目となるいずみ野変電所は、従来の気中式直流高速度遮断器に替わる新方式の遮断器として開発された、業界初の「直流高速度真空遮断器」を採用し、1988(昭和63)年5月23日に着工、1989(平成元)年4月14日に完成した。続いて1991年3月25日には三ツ境変電所、1993年5月28日には西谷変電所が完成した。3変電所はいずれも無人で、GIS(ガス絶縁開閉装置)と閉鎖型開閉装置を導入、充電部分の露出をなくし、感電事故や飛来物による障害を防止するとともに、メンテナンス作業を軽減した。さらにゆめが丘変電所を1996年12月3日に着工、1998年9月29日に完成した。GISとともにガス変圧器を導入し、より安全性を高めた。

これより前、1987年6月3日には、二俣川駅構内4線化や駅舎移転新築に先立って二俣川変電所の移転工事に着手し、1988年6月6日、さちが丘荷物センター跡地に完成、同日、電力司令所も移転した。

一連の増強で、相模鉄道㈱の変電所は9ヵ所となった。電力管理システムの導入により全変電所を無人化し、集中監視と制御を行う体制とした。

一方、1988年3月16日、二俣川～いずみ野駅間(上り・下り計12km)の電車線ツインシンプル化工事が完成した。これは電車に運転用電源を供給する架線を1本から2本にする工事で、電気容量が増大するとともに架線の摩耗が軽減されるものである。またこの工事で同時に吊架線の張力自動調整が全線で可能となり、保守作業軽減と安全性向上が図られた。



二俣川変電所



二俣川変電所の直流高速度遮断器

3. 業務の自動化・効率化

◆駅業務の自動化

従来、駅改札口では、駅係員が乗車券への入鋏や乗車区間および期間の有効・無効、精算の必要の有無などを目視で確認する作業を行っていたが、相模鉄道㈱では1991(平成3)年10月10日、上星川駅に初の自動改札機を導入した(5通路)。これを皮切りに各駅の自動改札化を進め、1995年3月19日の海老名駅への導入をもって全駅の自動改札化を完了した。1998年4月1日には、全自動改札機に不正乗車を防止する入出場チェックシステムが導入された。またバリアフリー化に対応するため、1997年11月の二俣川駅を皮切りに、車いすで利用できる幅広通路の自動改札機の設置を進めた。



上星川駅に初の自動改札機を導入

一方、従来は定期券発売窓口(横浜・星川・二俣川・三ツ境・大和・海老名の6駅に設置)のみで発売していた定期券を自動券売機でも発券できるよう、1992年4月1日、横浜駅に相鉄線初の自動定期券発売機を設置、以後二俣川駅に設置したほか、2000年代には定期券が購入できる多機能券売機の各駅への設置を行った。また、操作面を傾斜させて操作しやすくした傾斜型自動券売機を1992年12月25日から導入し(平沼橋駅など10駅)、自動精算機を1993年3月13日から設置する(鶴ヶ峰駅)など、発券・精算業務の自動化・利便性向上を急速に進めていった。



自動定期券発売機

◆ダイヤ作成システムの導入

相模鉄道㈱は1992(平成4)年3月11日、ダイヤ作成システムを導入した。これは、列車の加速度などさまざまなデータをあらかじめ入力しておくことで、コンピュータが自動的に列車ダイヤを描画するシステムで、従来手書きで行われていた列車運行図表や各駅の時刻表などの作図・作成作業の迅速化・能率の向上がなされた。また列車運行時刻や列車番号、到着番線など、ITCへ入力するデータ作成も容易となり、ダイヤ改正時の作業時間も短縮された。



貨物列車でジェット燃料を輸送

◆貨物列車の運行休止

1986(昭和61)年以降、相鉄線の貨物営業は米軍との輸送契約のみとなり、相模大塚駅の海老名方に起点のある厚木基地専用線を経由して厚木海軍飛行場までジェット燃料を輸送していた。この輸送契約が終了し、1998(平成10)年10月1日、相鉄線の貨物列車の運行はすべて休止となった。最終運行は同年9月28日、厚木～相模大塚駅間で行われた。

4. 乗合バス業の対応

◆路線バスの新設

相模鉄道(株)の自動車業は、路線バスの新設や深夜バスの運行などで地域のニーズに応え、高速バスの運行開始や貸切バスの新造車両への代替、バスターミナルの整備などさまざまな取組みを行った。管理業務の正確化・効率化を図るため、自動車総合管理システムを導入し、1987年10月に「運行管理システム」を、同年11月に「整備管理システム」を、同年12月に「営業管理システム」を完成した。しかし、輸送人員は、1985(昭和60)年度の4,300万人から2000(平成12)年度には3,600万人まで減少、事業収支は厳しい状況が続いていた。

こうしたなか、以下の路線バスを新設した。

1985年には、4月8日から天台線(かしわ台駅～天台～綾瀬市役所)を、9月16日から海老名総合病院線(海老名駅～海老名総合病院)を新設した。

1988年には、相模鉄道本線と県道丸子中山茅ヶ崎線との立体交差工事が完了したことにより、5月12日から瀬谷線(三ツ境駅(南口)～二ツ橋～瀬谷駅)を、また、海老名市道大谷峰線が開通したことにより、8月8日から浜田線(海老名駅～下浜田～国分寺台第12)と綾瀬西高校線(海老名駅～綾瀬西高校入口～国分寺台第12)を新設した。さらに、従来回送となっていた区間を営業路線化する形で、9月1日から二ツ橋小学校線(三ツ境駅～二ツ橋小学校～旭高校入口)を新設した。

1989年には、座間市都市計画道路の座間・南林間線が一部開通したことにより、4月19日から栗原高校線(さがみ野駅～栗原高校前～南林間駅)を、12月11日から地区公園経由線(三ツ境駅～地区公園～若葉台中央)を新設した。

1990年には、1月2日から変電所線(海老名駅～下浜田～変電所前)を、また、横浜ビジネスパーク(横浜市保土ヶ谷区)の開発に伴い、JR保土ヶ谷駅への昼間の交通アクセスを提供するため、9月3日から横浜ビジネスパーク線(保土ヶ谷駅西口～横浜ビジネスパーク～保土ヶ谷駅西口)を新設した。さらに、本郷工業団地(神奈川県海老名市)の完成に伴う輸送需要の高まりに応じるため、11月8日から本郷工業団地経由門沢橋線(海老名駅～本郷工業団地～門沢橋)、用田橋経由本郷工業団地線(海老名駅～用田橋～本郷工業団地)、上河内経由本郷工業団地線(海老名駅～上河内～本郷工業団地)を新設した。

1991年12月23日からは、緑園都市住宅地の開発による市街化の進展に対応して、緑園都市線(二俣川駅南口～緑園都市駅)を新設した。

1993年4月5日からは、海老名運動公園線(海老名駅～海老名運動公園)を新設した。なお、同路線の運行は午後のみであり、午前中は、神奈川中央交通(株)が同区間を別ルートで運行した。

1995年5月8日からは、横浜新道拡幅工事に伴う道路形状の変更のため、既存路線を延長する形で、ソニー研究所線(東戸塚駅西口～星川ランプ～東戸塚駅西口)の運行を開始した。

1996年8月26日からは、新桜ヶ丘・今井・法泉地区(横浜市保土ヶ谷区)の利用者からの交通利便性向上に関する要望に応える形で、星川新桜ヶ丘線(美立橋～新桜ヶ丘第1～保土ヶ谷駅西口)を新設した。

1997年12月1日からは、横浜営業所(横浜市保土ヶ谷区峰沢町)の開設に伴い、羽沢車庫線(横浜車庫～羽沢～上星川駅)、釜台車庫線(横浜車庫～釜台住宅第3～上星川駅)、横浜車庫線(横浜駅西口～岡野町～横浜車庫)を新設した。

1999年には、朝の通学利用者増加に対応するため、4月5日から希望ヶ丘緑園都市線(希望ヶ丘駅～緑園都市駅)を、また、「よこはま動物園」の開園に伴い、4月24日から中山動物園線(JR横浜線中山駅～市営集会場前～よこはま動物園)を新設した。なお、同園の開園時には横浜動物園線(横浜駅西口～鶴ヶ峰駅～よこはま動物園)、三ツ境動物園線(三ツ境駅～旭高校入口～よこはま動物園)も、既存路線を延長する形で運行を開始した。

2000年5月29日からは、綾瀬市^{たてかわ}蓼川地区における道路整備に伴い、綾瀬市からの要望に応じて、大和車庫線(大和駅～蓼川自治会館～綾瀬車庫)、海老名線(海老名駅～蓼川自治会館～相模大塚駅(南口))を、既存路線を経路変更する形で運行開始した。

一方、23時以降における利便性向上を目的とした深夜バスは、1988年12月29日に吉岡芝原線(海老名駅～国分寺台第12～吉岡芝原)で運行を開始し、1989年4月17日には旭高校線(二俣川駅北口～ニュータウン第1～旭高校入口)と試験場経由旭高校線(二俣川駅北口～運転試験場～金が谷・旭高校入口)、1990年8月6日には新桜ヶ丘団地線(和田町駅～新桜ヶ丘団地)、保土ヶ谷線(美立橋～保土ヶ谷駅東口)と南瀬谷小学校線(三ツ境駅～南瀬谷小学校)、1992年6月8日には釜台線(横浜駅西口～釜台住宅第3～上星川駅)と交通裁判所線(横浜駅西口～交通裁判所～宮田町)、1995年5月8日にはソニー研究所線(東戸塚駅西口～星川ランプ)の運行を開始するなど、設定路線を拡大した。また、1990年12月14日には、深夜急行バス海老名線(横浜駅西口～海老名^{*}駅)と若葉台線(横浜駅西口～関内駅北口～若葉台^{*}中央)を新設した。この深夜急行バスは、相鉄線の終電後、旅客に各駅までの足を提供するもので、運賃は横浜駅西口発海老名駅まで2,500円、横浜駅西口発若葉台中央まで1,600円、関内駅北口発若葉台中央まで1,400円などであった。

なお、1976年の年末年始より、寒川神社初詣バス(海老名駅～寒川神社)の運行を開始し、以降、毎年運行している。

◆路線バスの休止・廃止

路線バスを新設する一方で、利用者数を見据えながら、1986(昭和61)年6月16日からは土曜ダイヤの導入・拡大を行うとともに、利用者数が減少している路線では運行本数を調整して、効率的な輸送体制構築に努めた。しかし、これらの努力にもかかわらず、一部の路線については再編成を余儀なくされた。

再編成により休止(運行取りやめ)・廃止した路線は以下のとおりであった。

【旭営業所】

1995(平成7)年7月3日から廃止

- ・深夜急行バス若葉台線(関内駅北口～横浜駅西口～若葉台中央)

1999年4月5日から休止(翌年の同月同日に廃止)

- ・横浜ビジネスパーク線(保土ヶ谷駅西口～横浜ビジネスパーク～保土ヶ谷駅西口)
- ・県庁線(二俣川駅北口～保土ヶ谷駅東口～県庁前)



深夜急行バス

*深夜急行バス海老名線

1992年4月13日から、海老名駅行きは一部経路を変更し、停留所3カ所(二俣川駅北口、希望ヶ丘駅、相模大塚駅)を新設した。

*深夜急行バス若葉台線

1992年4月13日から、若葉台中央行きは始発を関内駅北口とし、横浜駅西口～上星川駅・西谷駅を経由する経路に変更した。



寒川神社初詣バス

- ・四季美台線(横浜駅西口～鶴ヶ峰駅～二俣川駅北口)
- ・川上団地線(横浜駅西口～東戸塚駅西口～川上団地第1)
- ・阿久和線(希望ヶ丘駅～阿久和)
- ・南台線(三ツ境駅(南口)～二ツ橋～南瀬谷小学校)
- ・瀬谷線(三ツ境駅(南口)～二ツ橋～瀬谷駅)
- ・下瀬谷線(三ツ境駅～下瀬谷)

【綾瀬営業所】

1995年10月1日から休止(翌年の同月同日に廃止)

- ・日産第1食堂線(相模大塚駅(南口)～第1食堂前～日産前)
- ・日産車両部線(さがみ野駅～車両部前～日産前)

1996年5月6日から休止(翌年の同月同日に廃止)

- ・鶴間線(相模大塚駅(北口)～鶴間駅)
- ・本厚木線(二俣川駅北口～海老名駅～本厚木駅)
- ・かしわ台線(かしわ台駅～海老名駅)
- ・厚木線(海老名駅～国分坂下～本厚木駅)
- ・海老名総合病院線(海老名駅～海老名総合病院)

1999年10月11日から休止(翌年の同月同日に廃止)

- ・光ヶ丘線(大和駅～光ヶ丘～引地台公園)
- ・栗原高校線(さがみ野駅～栗原高校前～南林間駅)
- ・日産線(相模大塚駅(北口)～小松原～日産前)
- ・上河内経由門沢橋線(海老名駅～上河内～門沢橋)
- ・上河内経由本郷工業団地線(海老名駅～上河内～本郷工業団地)
- ・用田橋経由門沢橋線(海老名駅～用田橋～門沢橋)
- ・本郷工業団地経由門沢橋線(海老名駅～本郷工業団地～門沢橋)
- ・中郷線(海老名駅～市民スポーツセンター～中郷)
- ・綾瀬西高校線(海老名駅～綾瀬西高校入口～国分寺台第12)
- ・変電所線(海老名駅～下浜田～変電所前)
- ・海老名運動公園線(海老名駅～海老名運動公園)
- ・才戸経由寒川神社線(海老名駅～才戸～寒川神社)

【横浜営業所】

2000年4月3日から休止(翌年の同月同日に廃止)

- ・平沼高校線(横浜駅西口～平沼高校～桜木町駅)
- ・日本カーリット線(和田町駅～日本カーリット)

◆バスターミナルおよび営業所の改良・新設など

1990(平成2)年7月27日に、二俣川ショッピングプラザ「相鉄ライフ」1階に位置する二俣川駅北口バスターミナルの使用を開始した。これにより、従来2ヵ所に分かれていた相模鉄道(株)の路線バス乗降場が1ヵ所にまとまるとともに、天候に左右されず、車道と歩道を分離した施設となった。また、1991年9月9日には、横浜市が建設した鶴ヶ峰バスターミナルの使用が開始された。これにより、周辺を通る相模鉄道(株)の路線バスは、一部を除きこのターミナルから発着することになり、従来分散していた鶴ヶ峰駅周辺のバス乗降場が統合されて利便性が向上した。

1990年8月5日、相模鉄道(株)は美立橋案内所を廃止した。この案内所は1983(昭和58)年3月7日、保土ヶ谷営業所の跡地に新設され、鉄骨造地上1階建ての施設に、定期券の発行や案内業務を行う事務所と乗務員用の休憩室などが併設されていた。

西横浜駅に隣接していた相模鉄道(株)西横浜営業所は、1968年に建築された施設が老朽化したことに加え、星川・天王町駅付近連続立体交差事業に伴い、相鉄線の車両留置線用地などとなるため廃止することになり、同営業所に替わる営業所として、横浜市保土ヶ谷区峰沢町に建設した横浜営業所を1997年12月1日から使用開始した。この営業所は、9,509㎡の敷地に、収容能力100両の車庫および営業事務所、整備工場を有し、西横浜営業所に所属していた乗合バス64両のほか、旭営業所の高速バス9両が所属となった。これにより、路線バス22系統と高速バス5系統(4路線)が同営業所の所属となった。

◆高速バスの運行

1980年代後半、好景気と高速道路網の拡充を背景に、都市間を結ぶ高速バス路線が急増した。起終点都市のバス事業者による共同運行や多くが夜間に出発し早朝に目的地に到着するという利便性、JRの長距離列車に対する運賃面での優位性などが特徴で、相模鉄道(株)でも1989(平成元)年3月23日、近畿日本鉄道(株)(現・近鉄バス(株))と共同で、初の夜行高速バス大阪線「ブルーライト号」の運行を開始した。なお、これに先立つ3月16日、相鉄ジョイナス1階に「貸切・高速バスセンター」を新設した。

その後、同年7月20日には羽後交通(株)と共同で田沢湖線「レイク&ポート号」を、7月29日には北陸鉄道(株)と共同で金沢線「ラピュータ号」を、翌1990年12月20日には防長交通(株)と共同で徳山線「ポセイドン号」を、同年12月21日には瀬戸大橋高速バス(株)(1992年7月1日から四国高速バス(株))と共同で高松線「トリトン号」を、1993年11月2日には新潟交通(株)と共同で新潟線「サンセット号」を、それぞれ営業開始した。

これらの高速バスの運行に合わせ、相模鉄道(株)は1990年10月18日、鶴屋町操車場跡地に相鉄鶴屋町駐車場ビル(鉄骨造、地上4階建、敷地面積1,935㎡)を完成した。同ビルは立体式駐車場(延床面積4,538㎡、300台)と業務棟(延床面積744㎡)からなり、バス駐車場を併設していた。業務棟には、旅客向けに待合室・更衣室・コインロッカー・コインシャワーなどを備えた「相鉄高速バスセンター」を設け、翌19日(2008年9月2日)から営業を開始した(2008年9月2日廃止)。

◆新型バス車両の導入

相模鉄道(株)では、乗合バスへの冷房付き新型バスの導入と既存車両の冷房化を進め、1991(平成3)年4月5日に全車両の冷房化を完了した。この間、新型バスにおいては、座席間隔の拡大、床材のノンスリップ化、方向表示幕の大型化といった改良も実施した。

環境意識の高まりを受け、1995年10月10日には、排出ガスや騒音を低減するアイドリング・ストップバス2両を導入、1996年3月27日にはブレーキ時のエネルギーを発進時の動力源として再利用し、省エネルギー・低排出ガスを実現する蓄圧式ハイブリッドバス1両を導入した。一方、バリアフリーに配慮し、乗降ステップが既存車両より低く、高齢者や子どもも乗り降りしやすい低床バス2両を導入し、1997年11月11日に運行を開始した。

また、狭隘な場所を通るため従来ナローバスに誘導員が添乗して運行していた路線のワンマン化を進めるべく、1991年6月5日、誘導員の不要な小型バス(全長約7m、定員43名)1両を綾瀬営業所に導入、鶴間線(相模大塚駅(北口)～鶴間駅)などで運行した。



ブルーライト号

*ブルーライト号

横浜駅西口～大阪(上本町6丁目)。1996年3月23日に湊町バスターミナル(難波)まで、2001年3月30日から下り便のみユニバーサル・スタジオ・ジャパンまで延長。2007年4月18日廃止。

*レイク&ポート号

横浜駅西口～田沢湖駅前ターミナル。2008年9月1日羽後交通(株)へ移管。

*ラピュータ号

相鉄高速バスセンター～金沢駅前。昼行便と夜行便があったが2000年3月16日付で昼行便廃止、2007年9月30日休止、同年10月1日廃止。

*ポセイドン号

相鉄高速バスセンター～徳山駅前。1993年11月2日休止、1994年8月25日廃止。

*トリトン号

相鉄高速バスセンター～高松駅。2001年12月20日に丸亀駅まで延長。2007年6月15日四国高速バス(株)へ移管。

*サンセット号

大和駅入口(夜行のみ)～横浜駅西口バスターミナル～万代シティバスターミナル。1997年9月1日廃止。



相鉄高速バスセンター



高速バスの3列セパレート型シート



バス共通カード



相鉄バスカード「干支シリーズ」

一方、高速バスは、定員29名の3列セパレート型シートを基本とし、自動車電話、テレビ・ラジオ・マルチチャンネルステレオ、トイレ、給湯器などを装備した車両を、各路線で運行した。

◆バスカードの導入

鉄道へのプリペイドカードの導入に続き、乗合バスでもキャッシュレス化が進んだ。相模鉄道(株)では、1992(平成4)年12月21日、旭・西横浜営業所所属の乗合バスでバスカードの使用を開始し、1993年2月19日までにすべての乗合バスへの導入を完了した。バスカードには、従来販売していたバス回数乗車券に替わる「相鉄バスカード」と、神奈川県内の他社のバスにも利用できる「バス共通カード」の2種類があり、バス共通カードは1994年10月1日から東京都内、1996年5月18日からは埼玉県内にも使用範囲が拡大された。

バスカードは、利用できる金額が販売額を上回る回数乗車券の代替として導入されたため、購入額にプレミアが付加された金額分の利用が可能であった(利用額は1,000円カードで1,100円、3,000円カードで3,360円、5,000円カードで5,850円)。また「相鉄バスカード」については、1993年12月27日に初の記念カードとして、干支を券面にデザインした「干支シリーズ」を発売した。なお、相鉄ホールディングス(株)と相鉄バス(株)は、2010年3月15日をもってバスカードの販売を終了し、同年7月31日で取扱いを終了した。

◆新たな運賃制度の導入

乗合バス業では、利用客が漸減する一方、1980年代後半以降の好景気で人件費などの諸経費が上昇したため、複数回の運賃改定を実施せざるを得なかった。

そうしたなか、利用者を限定しない持参人定期券を1992(平成4)年7月1日に、横浜市内の一部地域を対象として鉄道駅前のバス停から特定バス停間に使用区間を限定した「近距離定期券」を1997年9月1日に、通勤定期券保有者家族の土休日のバス利用に割引運賃を適用する「環境定期券」を1998年12月25日に導入した。さらに、1997年のゴールデンウィークを皮切りに、夏休み・冬休み・春休み期間中の小児運賃を50円均一とする、「ちびっ子50円キャンペーン」など、利用者拡大に向けた新たな運賃制度も開始した。

5. 貸切バス業の対応

◆帰郷バスと遊覧バス

レジャーが多様化するなか、相模鉄道(株)の貸切バス業は厳しい経営を強いられていたが、利用者の減少に対応するため、さまざまな施策を講じた。

1987(昭和62)年12月28日には、利用客減少を理由に1986年に中止した帰郷バスの運行を、年末の帰省客とスキー客をターゲットとして再開した。1991(平成3)年には、6月27日から9月27日までの期間限定で、相鉄観光(株)(現・(株)近畿日本ツーリスト神奈川)の主催による横浜市内遊覧バス「横浜物語」を運行した。この遊覧バスは好評を博し、以後1992年3月2日に「NEW横浜物語」、1995年3月16日に「横浜濱バス物語」と名称を変更、ルートと内容のグレードアップを行った。

また1995年7月21日から8月31日までの間、相鉄高速バスセンターと富士西湖パラマウント・パークとを結ぶ会員制バス「レイクライナー」を、富士急行(株)と共同で運行した。以降、毎年7月下旬から8月下旬まで運行し、1997年9月1日から



横浜市内遊覧バス「横浜物語」



会員制バス「レイクライナー」

相鉄自動車(株)(現・日本交通横浜(株))が運行を引き継いだ。同路線は輸送需要が高かったため、2005年7月23日から、相鉄自動車(株)が中距離高速バス「HIGHWAY CRUISER」河口湖線(相鉄高速バスセンター～河口湖駅)として、通年、富士急山梨バス(株)と共同運行し、2009年4月1日に相鉄バス(株)が、相鉄自動車(株)から同路線を譲受した。なお、2013年6月22日、富士山が世界文化遺産に認定されたことに伴い、同年以降7・8月の期間限定で、一部の便の行き先を「河口湖駅」から「富士山五合目」まで延伸して運行している。

◆相模鉄道(株)から相鉄自動車(株)への貸切バス移管

相模鉄道(株)の貸切バス業は、神奈川県と東京都(23区と町田市)を営業区域とし、二俣川営業所を拠点に38両の車両を展開し、種々の取組みを行ってきたが、依然厳しい経営状況が続いていた。相模鉄道(株)では事業主体の見直しも含む抜本的対策を検討し、事業者間の競争激化・レジャーの多様化などが顕在化するなかで幅広いニーズに対応するとともに小回りの利く経営体制できめ細かなサービスを提供するため、1997(平成9)年4月1日から、貸切バス38両のうち28両を、相鉄自動車(株)に移管することとした。

これにより、相鉄自動車(株)は貸切バス業の再建へ全力を注ぐこととなった。

第3節 流通業の幅広い展開

1. フランチャイズチェーンの展開と(株)イストの設立

◆相模鉄道(株)・相鉄企業(株)の販売業への進出

個人の消費動向が多様化した1980年代後半、相模鉄道(株)は商事業の新しい展開として、物品販売業や飲食業などに力を入れた。

1989(平成元)年3月11日、輸入生活雑貨店「ist」(横浜市泉区、売場面積620㎡)を、相鉄緑園都市サービスステーションの一部として開店した。大きな吹抜けのある2階建ての店内には、ヨーロッパを中心とした海外の高品質で個性的な洋食器やキッチン用品、家具、インテリア小物などをそろえ、消費者ニーズをとらえた商品と明るくスマートな店舗イメージが好評を博した。店名は、暮らしを主体的に楽しむ“人”に応える生活雑貨店でありたいとの考えから「～する人」という意味の英語「ist」が付けられた。運営は1989年3月11日より1998年3月31日まで東海開発(株)(現・東和アークス(株))に委託した。

1998年4月1日には湘南台駅前に相鉄湘南台ビル「時遊食館」(鉄筋コンクリート造、地上5階・地下1階建、敷地面積239㎡、延床面積999㎡)を開業し、相模鉄道(株)初のフランチャイジーとなるカフェ「ドトールコーヒーショップ湘南台西口駅前店」と飲食店「オリーブの木湘南台西口駅前店」(2005年12月31日閉店)、オリジナル店舗「カラオケシンシア湘南台店」の3つの直営店舗を開店した。また、同年7月15日には緑園都市植松ビルにハンバーガーショップ「フレッシュネスバーガー緑園都市店」を開店した。これらの直営店舗の運営は東海開発(株)に委託し、運営ノウハウ取得のため相模鉄道(株)社員が同社に出向した。

一方、相鉄企業(株)は1980(昭和55)年4月29日、まきが原ショッピングプラザ「相鉄ライフ」内に「万騎が原ブックセンター」を開店し、書籍販売業に進出した。同社は1993年までに、相鉄ブックさがみ野店、天王町店、大和店、星川店、弥生台店、



輸入生活雑貨店「ist(イスト)」

* 輸入生活雑貨店「ist」

2003年10月22日から「ist LIVING DESIGN 緑園都市店」。



湘南台駅前に建つ「時遊食館」

* 万騎が原ブックセンター

1980年11月28日より「相鉄ブック万騎が原店」。



相鉄ブック万騎が原店

三ツ境店、緑園都市店、相鉄本社ビル店、二俣川店を相次いで開店した。1997年3月8日には、書籍販売とビデオ・CDレンタルの複合店舗「TSUTAYA緑園都市店」を開店した。相鉄企業(株)初の複合店舗であり、1階で書籍・雑誌の販売、2階では「TSUTAYA」の加盟店としてビデオとCDのレンタルを行った。



am/pm相鉄二俣川駅店

◆(株)イスト

1999年5月12日 設立

2014年4月1日

相鉄流通サービス(株)より開発事業および不動産賃貸事業などを譲受、相鉄ステーションリテール(株)と商号変更

(資本金の推移)

1999年5月(設立) 1,000万円

◆(株)イストの設立

相模鉄道(株)は、直営店の多店舗化と多角化に注力するため、建設資材などの取引に関する業務を1998(平成10)年4月1日をもって相鉄興産(株)に移管した。また直営店の効率的な運営のため、1999年5月12日、(株)イストを設立した。同社は東海開発(株)に代わり、7月1日より相模鉄道(株)から飲食など4店、物品販売3店の運営を受託した。さらに相模鉄道(株)から、11月9日にはコンビニエンスストア「am/pm相鉄二俣川駅店」、2000年2月27日には「ドトールコーヒーショップ三ツ境店」の運営も受託した。

相模鉄道(株)は2000年4月7日、「TSUTAYA片倉町店」を開店した。同年6月8日には「am/pm相鉄希望ヶ丘駅店」、10月20日には「TSUTAYAさがみ野駅店」と「am/pm相鉄さがみ野駅店」など、フランチャイジーおよびオリジナル店舗を立て続けにオープンし、いずれも運営は(株)イストが受託した。



TSUTAYA片倉町店

2. 相鉄ローゼン(株)のサービス強化

◆システム導入による効率的な店舗運営

相鉄ローゼン(株)は、顧客のニーズに応える商品提供とサービスの向上を目指し、さまざまな情報システムを取り入れていった。1984(昭和59)年3月1日、電算機センターに大型コンピュータを導入、スーパーマーケット全店でEOS(Electronic Ordering System: 電子式補充発注システム)の使用を開始した。1985年3月1日にはスーパーマーケット全店でバーコードスキャナー(光学的自動読み取り機)を導入した。これは、相鉄ローゼン(株)独自のバーコードを記載したプライスカードをEOS端末機で読み取って発注を行うもので、発注作業の簡素化とミス防止に効果を上げた。同年9月1日には経理業務のシステムを大型コンピュータに統合した。

1986年7月18日より、そうてつローゼン大口店と弥生台店の両店でPOS(Point Of Sales System: 販売時点情報管理システム)の実験を開始した。POSでは、取り扱うほぼすべての商品にバーコードを付け、これをスキャンすることでレジでの会計を行う。レジ作業の大幅な省力化・正確化にとどまらず、バーコードによって販売時点における状況を総合的に把握、本部と各店舗の端末とを連動させることで、売上げ、在庫、商品などの管理を容易にし、効率のよい売場を実現して企業体質強化につながるシステムであった。

1986年10月30日に開店したそうてつローゼン三ツ境店にもPOSを試験導入し、これらの実験結果からソフトウェアを改良して、既存店への導入およびEOSとPOSの一元化を行うこととした。1991(平成3)年6月26日には、スーパーマーケット全店へのPOS導入が実現した。

このほか、視覚に訴える明るい売場づくりを実施するVMD(Visual Merchandising)を1986年10月30日にそうてつローゼン三ツ境店に本格導入し、以降、衣料品売場と専門店への導入を進めた。



VMDを導入したそうてつローゼン三ツ境店衣料品売場

◆Vマーク商品と㈱八社会

相鉄ローゼン(株)は、1983(昭和58)年1月20日より、小田急商事(株)、(株)京王ストア、(株)京成ストア、(株)京浜百貨店(現・(株)京急ストア)、(株)東急ストア、(株)東武ストア、松電商事(株)(現・(株)デリシア)の私鉄関連チェーンストア7社とともに、Vマーク商品の販売を開始した。これは、使用頻度の高い食品や衣料、雑貨などを品質最優先で企画し、スケールメリットによる低価格で販売するものであった。1986年度には品目数が226、年間売上高は8社合わせて48億円にのぼった。1987年9月1日、これら8社は、Vマーク商品の開発強化および国内商品や海外商品の共同開発・仕入れを進めることを目的として、(株)八社会^{*}を設立した。

◆「お客様第一主義」の強化

相鉄ローゼン(株)の前身である相鉄興業(株)では、1980(昭和55)年3月1日から、人的サービス向上を目的とするKS(活気とサービス高揚)運動を展開するなど、顧客サービス向上に取り組んだ。1990(平成2)年3月26日、そうてつローゼンのイメージソング「人あざやかに」(作詞・伊藤アキラ、作曲・桜井順、歌・チェリッシュ)が完成し、以降、店内のBGMに使われることとなった。会社創立30周年の節目となる1992年6月1日には、「そうてつローゼン」の新しいストアシンボルマークを導入した。人と花をモチーフに豊かで健康的な生活感を表現し、ロゴタイプも柔らかくデリケートさを感じさせながらも勢いがある書体を採用した。

一方、顧客のニーズに応えるサービスとして、1986年7月3日から、移動販売車「モービルマート」をスタート、そうてつローゼン富岡店、ドリームランド店、横山台店において「さわやか号・生鮮お届け便」の名称で運用した。最大14店舗で稼働したが、1991年11月、そうてつローゼン富岡店でのサービス休止をもって終了した。

1995年5月1日からはそうてつローゼン大和店の警備を、6月1日からは清掃業務を直営化して清潔感・安心感・快適性のある売場づくりに努めた。

また、1999年5月6日にそうてつローゼン二俣川店で、購入商品の宅配サービス^{*}を開始した。2001年7月6日からそうてつローゼン葉山店、2003年7月28日からそうてつローゼン国分寺台店、海老名店、杉久保店に拡大し、2018年3月末日時点、25店舗で実施している。

◆物流の効率化

1990年代、バブル経済崩壊後に市場・個人消費が低迷したことを受け、流通業界では製造・配送・販売業者が一体となってコスト削減に取り組むこととなった。

相鉄ローゼン(株)では1992(平成4)年4月20日、綾瀬チルドセンター(延床面積3,907㎡)を開設し、ここを拠点とした日配食品共同配送システムを稼働させた。このシステムは、従来取引先が各店舗へ個別に納品していた商品を同センターに一括納品し、同センターで商品を検品、仕分けし、混載して各店舗に納品するものである。納品車両数を削減でき、店舗では納品された商品を検品せずに陳列することができるようになったほか、従来のEOS伝票に替わって納品明細書が添付されることで、ナンバリングや伝票伝送作業が不要となった。また、指定時間に取扱商品の大部分が一括納品されることにより、店舗作業の見通しが立てやすく、人員体制も効率化された。

1993年9月1日には同様の仕組みで、取引先である(株)菱食(現・三菱食品(株))が開設した首都圏物流事業所内の厚木グローサリーセンターを拠点とする一般食品新物流システムを、1994年9月1日には厚木第二グローサリーセンターを拠点に菓子



Vマーク商品

*㈱八社会

資本金4,000万円、取締役社長中原功(株)東急ストア社長)、相鉄ローゼン(株)12.5%出資。



新しいシンボルマークをデザインした紙袋



モービルマート

*二俣川店の宅配サービス(導入時)

5,000円以上購入(アイスクリームや冷凍食品などを除く)した顧客には無料、5,000円未満の顧客には300円で、10時から14時までの受付は当日の15時から17時、それ以降の受付は翌日に、自宅まで商品を届けた。



綾瀬チルドセンター

新物流システムを、10月1日には立川低温物流センターを拠点に冷凍食品新物流システムを稼働させた。1995年8月1日には、神奈川県流通サービス協同組合が開設したKRS共同物流センター内に相鉄ローゼンHKC(ハウスウェア共同配送センター)を設けて家庭用品新物流システムを稼働させたほか、1996年2月1日にはアイスクリーム新物流システムを、1999年10月1日には伊藤忠食品(株)が開設した町田物流センター内に相鉄ローゼン酒類共配センターを設けた。これらにより、相鉄ローゼン(株)のスーパーマーケットで扱う商品のほとんどがセンター経由の配送となった。

なお、1997年3月16日には事務センターを新設して事務処理を集約し、大幅な効率化が図られた。



そうてつローゼン大和店

***相高ストア大和店**

1959年7月1日開店。そうてつローゼンに変更後、大和駅周辺連続立体交差工事に伴い1988年8月31日閉店。



ストップ・イン(緑園都市駅)

◆地域特性に合わせた店舗展開

相鉄ローゼン(株)が誕生した1982(昭和57)年の同社が運営するスーパーマーケットは55店であった。同社はその後も店舗のスクラップ&ビルドを進め、神奈川県内の各地域特性に合わせた店舗展開を進めた。

1991(平成3)年11月15日、そうてつローゼン大和店(大和市深見台、売場面積7,333㎡)が開店した。大和市にはかつて(株)相高が相高ストア大和店を出店しており、再度の進出であった。同店は相鉄ローゼン(株)最大となる店舗であったが、2016年9月30日をもって閉店した。

2003年10月22日に開店したそうてつローゼンかしわ台店(海老名市柏ヶ谷、売場面積982㎡)は、同社が目指す「時流適応型」のモデル店舗であった。黒を基調とした内装の生鮮食料品売場を入口前に大きく展開し、店内の天井や壁の装飾はイラストなどを用いて楽しさのある空間とした。ストア内の総菜売場は相鉄ローゼン(株)による直営で、「できたて」「あつあつ」をアピールする実演販売コーナー、時間帯ごとにおすすめ品を提供するバイキングコーナーを設けた。

なお、コンビニエンスストアの実験店舗として「ストップ・イン」を開業、1988年10月25日から2000年8月30日まで緑園都市駅構内で営業したほか、二ツ橋店、さがみ野店、星川店を展開した。

◆環境活動の推進

消費者の環境保護意識の高まりを受け、相鉄ローゼン(株)は積極的に環境保全のための活動に取り組んだ。1991(平成3)年4月1日より、レジ袋不要の顧客へのスタンプサービスをそうてつローゼンドリームランド店と緑園都市店で開始、同年10月1日には全店舗に拡大した。ポリエチレン袋の使用量を減らすことを目的に、顧客に買い物袋の持参を呼びかけ、袋不要の場合に押印するスタンプが20個たまると100円の還元を行うものであった。

1991年4月8日には、牛乳パック回収をそうてつローゼン六ツ川店、左近山店、いずみ野店で実験的に開始し、1999年9月16日から全店舗で本格実施した。1991年7月7日には、そうてつローゼン公田店でアルミ缶回収の実験を開始した。

また、同年9月1日から、発泡スチロールトレイの回収実験をそうてつローゼン弥生台店、ひかりが丘店、南まきが原店で開始した。これは商品の包装に使われたトレイを顧客が利用後に持参して店内に設置した回収箱に入れ、これを業者が回収して再資源化するもので、顧客からの好評を得て、翌1992年3月1日からスーパーマーケット全店舗での回収をスタートした。また、1993年2月1日、再生発泡スチロールトレイを全店舗で導入した。このトレイは、回収されたトレイと工場内端材を材料としてつくられ、何度でも繰り返し再生することが可能であった。これによ



透明タイプトレイの回収を開始

り、発泡スチロールトレイのリサイクルシステムが確立された。2001年7月からは、透明タイプトレイの回収をそうてつローゼン緑園都市店、高田店で開始したが、これは全国でも初の試みであった。

1991年11月から、毎月1日を「省エネの日」と決め、ポスターなどで顧客へPRするとともに相鉄ローゼン(株)の全従業員の意識高揚を図った。

3. 相鉄ローゼン(株)の事業の広がり

◆レディースファッション専門店の展開

相鉄グループのレディースファッション専門店の展開は、1962(昭和37)年11月23日に(株)相高が横浜ステーションビルに相高横浜駅店を開店したのが端緒となった。一方相鉄興業(株)が1964年12月1日、ダイヤモンド地下街(現・相鉄ジョイナス)に初めての大型衣料専門店「女性の店そうてつ」を開店した。1982年に両社が合併して相鉄ローゼン(株)が誕生して以降、チェーンとしての統一が課題となり、専門店の名称を「リリオ」に統一した。同時に各店舗での取扱商品を変えて、チェーンとしての魅力を高めた。1991(平成3)年5月11日には、専門店として東京都初出店となる「リリオワンオーナーイン店」を、渋谷・文化村通りに面したファッションビル「ONE-OH-NINE」5階に開店するなど、積極的な出店を行った。

◆映画館の移転

相鉄映画館ビル(旧・相鉄ムービル)には5つの映画館が収容され、各館の運営は相鉄ローゼン(株)が行っていた。これら5館は、横浜駅西口駅前再開発事業に伴い、1988(昭和63)年11月12日、相鉄南幸第2ビル「相鉄ムービル」に移転し、「ムービル1~5」となった。ムービルには最新の35ミリ映写機が導入され、客席にはフランス製のひじ掛けイスが設置されるなど、高級感のある快適な内装とした。開館日には映画「怪盗ルビイ」に出演の小泉今日子、真田広之、和田誠監督の舞台挨拶があり、入場制限が行われるほどの盛況であった。

◆飲食業の展開

相鉄グループの飲食業の展開は、1956(昭和31)年4月2日、相鉄不動産(株)が相鉄線横浜駅内に「相鉄食堂」を開店したことがその端緒となった。相鉄不動産(株)の飲食業は1962年9月1日、相鉄興業(株)に譲渡され、1982年に相鉄ローゼン(株)となったときには、飲食店14店舗を有していた。

一方、(株)横浜精養軒がレストラン「ジョイナス『精養軒』」など5店を、(株)相栄が喫茶店「マイネ」、甘味喫茶・軽食店「二葉」など4店とフードコート4店を運営するなど、複数の会社が飲食業を展開していた(1997年)。

1998(平成10)年8月1日、相鉄ローゼン(株)は、(株)横浜精養軒と(株)相栄を合併させて相鉄フードサービス(株)を設立するとともに、同年9月1日、自社の飲食店4店(レビ、シェルポート、クレール、ル・ルボワール)を相鉄フードサービス(株)に移管し、飲食業の一元化を図った。

*相高横浜駅店

1973年11月20日に愛称を「バル」とし、さらに1983年11月12日「リリオシャル店」に改称。2005年3月18日に同店を2店舗とし「プリリア」ノコノアに改称。2006年2月28日閉店。

*女性の店そうてつ

1973年6月1日「そうてつリリオ地下街店」に改称し、1983年11月12日「リリオダイヤモンド店」に改称。2007年8月19日閉店。



リリオワンオーナーイン店

*相鉄食堂

1961年7月21日に閉店し、翌1962年11月23日、相鉄興業(株)が横浜ステーションビル(のちのシャル)地下1階に移転・開業した。



ジョイナス「精養軒」

相鉄フードサービス(株)

1957年 8月29日
(株)横浜精養軒として設立
1998年 8月 1日
(株)相栄と合併し、相鉄フードサービス(株)と商号変更
1998年 9月 1日
相鉄ローゼン(株)から飲食店(レビ、シェルポート、クレール、ル・ルボワール)4店を譲受
2009年 8月 1日
(株)相商に合併
(資本金の推移)
1957年 8月(設立) 1,000万円
1998年 8月(増資) 5,000万円(相鉄ローゼン(株)100%)
1998年 9月(増資) 2億円
1998年10月(増資) 3億5,000万円
2003年11月(減資) 1,000万円

4. バブル崩壊後の砂利業と石油業

◆砂利業の再編と復調

砂利業は鉄道業とともに古い歴史をもち、相模鉄道(株)は東京都、神奈川県、千葉県、栃木県に営業所・出張所を設け、関東一円にわたって骨材や生コンクリート販売など、幅広い営業活動を行ってきた。しかしバブル経済崩壊による景気低迷とその後の緩慢な景気回復のなかで、公共事業の鈍化や民間企業の設備投資の抑制が続いた。特に建設需要の低迷と仕入れ原価や輸送費の上昇、販売価格の下落などは大きく、事業環境は厳しいものとなった。これらを受け、相模鉄道(株)は事業構造の抜本的な見直しを進めた。

相模鉄道(株)は、1988(昭和63)年12月5日、御前崎海運(株)の株式を小池造船海運グループに譲渡した。1992(平成4)年3月16日には出田町埠頭での骨材管理業務を東海開発(株)に、また、1998年4月1日、建設資材などの取引に関する業務を相鉄興産(株)(現・東和アークス(株))に移管した。

こうして体制をスリムにする一方、「東京湾横断道路浮島取付部工事・木更津人工島建設工事」「沖ノ島鳥島侵食防護工事」などの公共事業を中心とする大型プロジェクトへの販売を積極的に展開した。

その後、砂利業における製販一体化とグループ内の商社機能の集約化、市場競争力の強化と経営効率化を目指して、2001年10月1日、相模鉄道(株)は砂利業および石油製品販売業を相鉄興産(株)に譲渡した。



橋脚の土台となる基礎石などを納入した東京湾横断道路(アクアライン)工事

◆石油業の新形態を提案

一方、相模鉄道(株)は、運営する相鉄SS(サービスステーション)の新規顧客の獲得を積極的に進めるため、付加価値の高いガソリンスタンドを建設していった。

1987(昭和62)年5月の消防法改定でガソリンスタンドと異業種との併設が認められたことから、翌1988年9月9日に開店した相鉄山手台SSでは、ガソリンスタンド施設に加え、飲食店を2階に設置した。女性客をターゲットとしたメニューづくりは、周辺住宅地の付加価値を高めるとともに、ガソリンスタンドの新しい形を提案するものであった。また、同年12月15日に開店した相鉄緑園都市SSは“人と車のふれあいステーション”と位置づけられた。従来のスタンドにはない広々としたサービスルーム(97㎡)を備えていたほか、輸入生活雑貨店「ist」を併設して、顧客が憩いの場として利用できる環境づくりを行った。

このほか、1992(平成4)年8月1日には敷地面積が1,000㎡を超える大型店舗の厚木インターチェンジSS、1995年8月10日に国道16号線沿いの今宿SS、1998年4月19日にやよい台SSがそれぞれ開店し、相鉄SSチェーンは神奈川県下に最大16店舗(1997年12月18日時点)を擁することとなった。



相鉄緑園都市SSサービスルーム

第4節 不動産業の急拡大

1. 集合住宅の分譲

◆集合住宅分譲への本格参入

1980年代以降、個人向け不動産市場においては、集合住宅の増加が顕著であった。神奈川県の実業調査では、1983(昭和58)年には全住宅の40.7%で

あった集合住宅は、1993(平成5)年には51.8%と一戸建てを上回り、さらに2003年には54.8%となっている。

相模鉄道(株)でも、この時期に集合住宅の開発に本格的に進出した。「パークシティ本牧」は米軍住宅地跡地約88haを利用した9棟(A~I棟)の集合住宅で、相模鉄道(株)は三井不動産(株)と共同でD棟・F棟を開発、1987年12月からD棟53戸、F棟77戸の分譲を開始した。専有面積62㎡~121㎡、間取り3LDK~4LDK、価格3,100万円~9,000万円台であった。

1988年10月には、かしわ台駅付近で集合住宅「かしわ台クラルテ」(第1期135戸、第2期125戸、敷地面積1万6,175㎡)を分譲した。11階建て、3LDK中心で、第1期住戸は専有面積65㎡~107㎡、価格は2,500万円~5,400万円台であった。

1994(平成6)年10月からは、JR宇都宮線古河駅に隣接した「ヴェルシティ古河」(318戸)の販売を開始した。約1万5,000㎡の敷地に4つの高層住棟とオープン・コミュニティ・スペースを配置し、駅から緑豊かな遊歩道を設置した同物件は、専有面積59㎡~88㎡、価格1,600万円~4,300万円台であった。

一方、総合不動産会社を目指す相鉄不動産(株)も分譲業に進出した。1985年10月、横浜駅から徒歩7分の立地で初の集合住宅「ピュアハイツ台町」を分譲した。ワンルームタイプ22戸・ファミリータイプ20戸からなる12階建てで、等価交換方式により開発した。敷地面積747㎡、専有面積17㎡~92㎡、間取り1LDK~3LDK、価格1,300万円~4,200万円台であった。1999年4月には会社創立20周年記念事業として、横浜駅西口から徒歩10分の横浜市都市計画道路環状1号線沿いに「アéria20」(109戸)を分譲した。建築デザイナー・内田繁氏を総合プロデューサーに迎え、棟全体を対象とする集中浄水システム、全戸へのインターネット常時接続回線などを導入、専有面積36㎡~88㎡、間取り1LDK~3LDK、価格1,800万円~6,600万円台であった。

◆「グレースシア」ブランドの誕生

1993(平成5)年10月に分譲を開始した「グレースシア梶ヶ谷」(敷地面積1,100㎡、専有面積65㎡~72㎡、間取り2LDK+S~3LDK、価格4,400万円~5,700万円台、27戸)は、相鉄グループの集合住宅ブランド「グレースシア」シリーズの第1号で、全戸に大型トランクルーム、エアコン、オートロックを備えていた。「グレースシア(GRACIA)」は、「上品」や「洗練」という意味の英語Graceに、「~の地」という意味のラテン語の接尾辞iaを合わせて「よい住まい」を表現した造語である。

相模鉄道(株)ではその後も、相鉄線沿線を中心にグレースシアブランドの集合住宅を多数分譲し、中堅不動産分譲事業者として躍進した。

◆JVによる集合住宅開発

相模鉄道(株)では、グレースシアブランドの集合住宅分譲を進めるとともに、ほかの不動産会社と共同での集合住宅の開発にも取り組んだ。

星川駅前の旧・古河電池工場跡地4万6,764㎡を開発する「横浜ミッドタウンプロジェクト」の居住エリアでは、1989(平成元)年4月から三井不動産(株)と共同で「ステージ星川」を分譲した。駅から続く緑の歩道や豊富な植栽、テニスコートを配した1万2,973㎡の敷地に立つ14階建て、253戸の集合住宅で、第1期は専有面積69㎡~129㎡、間取り2LDK~4LDK、価格5,000万円~1億1,100万円台であった。

同じく三井不動産(株)と共同で1998年9月から分譲した「パークシティ横濱」(19階建、647戸)は、星川駅から徒歩4分の2万2,661㎡の敷地にA~E棟の5棟が並ぶ大規模環境創造型マンションで、専有面積65㎡~99㎡、間取り2LDK~4LDK、価



かしわ台クラルテ



グレースシア常盤台公園



工事中のステージ星川



パークシティ横濱

格3,700万円～1億円台であった。

1990年代に入ると、マンションの高層化・大型化が進んだ。この結果、開発・建設費の膨張によるリスク分散の意味からも、複数の不動産ディベロッパーがJV（ジョイントベンチャー）での開発を行うケースが増加していた。

相鉄不動産(株)でもJVによる集合住宅分譲に積極的に進出した。1998年9月から日産不動産(株)・長谷工不動産(株)と共に「エルパティオ」(敷地面積1万7,753㎡、専有面積66㎡～93㎡、価格2,600万円～4,800万円台、235戸)を、同年2月からは伊藤忠商事(株)・日本信販(株)・トータルハウジング(株)・(株)長谷工コーポレーションと開発した「八王子みなみ野シティエグザガーデン」(敷地面積3万3,358㎡、専有面積78㎡～105㎡、価格3,100万円～4,900万円台、400戸)を分譲した。翌1999年6月から、(株)大和土地建物・(株)東洋不動産とともに「メイフェアパークス溝口」(敷地面積2万5,580㎡、専有面積70㎡～128㎡、価格3,400万円～7,400万円台、548戸)を、翌2000年6月からは、「エルパティオ」に隣接した敷地に、日産不動産(株)・(株)長谷工コーポレーションとともに「アリスガーデン横浜」(専有面積66㎡～86㎡、価格2,400万円～3,700万円台、251戸)を分譲した。また同年10月、横浜駅西口エリアで初のタワーマンション「シルエタワー横浜」を(株)大京とともに分譲した。26階建て、166戸の住戸は専有面積46㎡～159㎡、価格1,900万円～1億3,800万円台であった。

一方、相模鉄道(株)がJVに参加して分譲した集合住宅としては、相鉄不動産(株)・洋伸不動産(株)・平和不動産(株)・(株)長谷工コーポレーションと開発した「若葉台ワーズワースの丘」(2000年11月分譲開始。敷地面積2万4,071㎡、専有面積80㎡～125㎡、価格3,600万円～6,400万円台、350戸)などがあつた。

この間、三井不動産(株)とは、小田急相模原パークホームズ、大倉山北パークホームズ、南林間パークホームズ、ステージ宮崎台、ザ・コート山手台など、中小規模の集合住宅も共同で開発した。

2. リゾート住宅の分譲

◆リゾートマンションの分譲

国民生活の高度化や週休2日制の普及などによりリゾートに対する関心が高まるなか、リゾート住宅の分譲にも力を入れた。

相模鉄道(株)は、1988(昭和63)年4月から、箱根町元箱根で「エーデル元箱根」を分譲した。芦ノ湖を一望する高台に建つ地上3階建、敷地面積1万1,000㎡、32戸の集合住宅で、サウナ付き大浴場やフロントサービスを備え、1期24戸は専有面積97㎡～132㎡、間取り2LDK～3LDK、価格5,400万円～1億200万円であった。渡り廊下のあるおしゃれな設計は、翌1989(平成元)年10月27日に、「第34回神奈川県建築コンクール」で奨励賞を受賞した。

1991年10月には「エムロード熱海」を分譲した。住戸棟と、バーラウンジや大浴場のあるクラブハウス棟からなり、熱海市街と相模湾を一望する敷地面積4,416㎡に建つ住戸66戸は、専有面積49㎡～81㎡、間取りLDK+S～2LDK、価格2,900万円～1億700万円台であった。

◆「相鉄的那須」でのリゾート展開

1990(平成2)年9月から、相模鉄道(株)は別荘地「相鉄的那須」で米国製輸入建売高級別荘「ザ・ヴィラ」(敷地面積721㎡～743㎡、延床面積115㎡～125㎡)を分譲した。米国で設計・加工された原材料を輸入し、組み立てて土地付きで販売するもので、



八王子みなみ野シティエグザガーデン



若葉台ワーズワースの丘



エーデル元箱根



米国製輸入建売高級別荘「ザ・ヴィラ」

まず5,000万円台の価格で10棟、1991年春に8棟を分譲した。高強度の枠組壁工法で、上げ下げ窓や両開き窓、大型バルコニー、ビルトイン型暖炉など、アメリカ風のデザインが特徴であった。

また1994年7月28日、コテージ型林間リゾートホテル「コテージ アルカディア」を開業した。4・6名用の8戸の山小屋風コテージと、ロビーやフロント、和洋客室3室、レストラン「オークテラス」や温泉を備えたヴィレッジセンターからなるリゾート施設で、家族連れやグループ客に好評を得た。なお、「コテージ アルカディア」では2004年4月29日、開業10周年を記念して、洋風・和風2種類の露天風呂と、イギリスのブランド「ローラ アシュレイ」のインテリアコーディネートによる2名用のスイートルーム「ブランドコテージ」を新設した。



コテージ型林間リゾートホテル「コテージ アルカディア」

3. 総合不動産会社を目指す相鉄不動産(株)

◆相鉄アップスネットワーク

総合不動産会社を標ぼうする相鉄不動産(株)は、仲介業の充実を図った。1986(昭和61)年2月、相模鉄道(株)および相鉄建設(株)とともに(社)都市開発協会の認定を受け、不動産取引業者間の情報交換組織「流通機構」の自社運営を開始した。名称は「相鉄不動産流通ネットワーク」で、これは3社間の情報交換により、売主と買主からの依頼物件の早期成約を目指すものであった。

また相鉄不動産(株)は、1988年7月8日、地域の不動産業者との営業協力体制を強化するため、「相鉄アップスネットワーク」^{*}を設立した。同社と取引のある相鉄線沿線および神奈川県下の有力事業者38社が加盟して、相互の不動産情報の交換や取引の活発化で事業を活性化し、友好関係を強化することが目的であった。週1回の物件登録公開をはじめ、情報交換会なども実施したが、2001(平成13)年1月31日に解散した。



UP'Sのロゴを付けた相鉄不動産(株)店舗

*相鉄アップス

「アップス(UP'S)」は、1988年3月18日に、相鉄不動産(株)が、仲介部門の新ブランドロゴマークとして定めたもので、「UPするもの=生活向上イメージ=相鉄の仲介」を意味していた。

◆相鉄不動産(株)の再編

相鉄不動産(株)では、1988(昭和63)年10月1日、注文住宅業のブランドロゴマーク「HOUSE'S」^{ハウゼス}を制定した。これは優れた設計と最新技術をもとに、住む人の個性をデザインする良質な住まいを提供する同社の姿勢を表現するものであった。さらに、注文住宅の需要喚起・受注促進を図るため、1998年(平成10年)1月1日には、簡潔で認知・理解されやすいブランド名「相鉄ホーム」に変更した。

また同社は、1985年11月16日には海老名住宅展示場にモデルハウスを、1987年6月21日には緑園都市住宅展示場にモデルハウス(1998年閉鎖)を、1992年1月10日には東戸塚住宅展示場に注文住宅用モデルハウス(1996年7月31日閉鎖)を設けた。

こうした営業努力にもかかわらず、1990年代に入るとバブル経済の崩壊に伴い、不動産業界の業績は極度に落ち込み、相鉄不動産(株)でも事業の再構築が急務となった。相鉄グループの分譲業の再編とともに、1994年7月1日、相鉄不動産(株)は相模鉄道(株)から分譲部門を、相鉄建設(株)から木造住宅建設部門を引き継いだ。これにより営業力・技術力の強化を図り、同社は仲介・賃貸管理・分譲・請負工事の各事業を展開する総合不動産会社として、一層の発展を目指すこととなった。



緑園都市住宅展示場

*24時間通路

2009年8月27日から「大通り」と改称。

23時通路

2009年8月27日から「小径」と改称。

三角広場

2002年11月29日廃止。

*デート広場

2009年8月27日から「広場」と改称。

*ザ・ダイヤモンド

1964年のダイヤモンド地下街開業以降、横浜地下街(株)は以下のような施策を展開した。

1965年3月19日

第1回来街者調査を実施

1965年10月25日

横浜駅前ビル(現・コンフォート178ビル)連絡口開口

1968年11月30日

横浜岡田屋(現・横浜モアーズ)地下2階に飲食専門店街「ニューダイヤモンド味の街」開業

1969年4月1日

横浜地下街第2駐車場開業(2008年4月1日「横浜駅西口第2駐車場」と改称。延床面積2,644㎡、120台)

1970年2月1日

横浜岡田屋地下1階に食料品販売店街「ニューダイヤモンドのれん街」開業(地下2階と合わせ、1974年4月26日より「飲食街パティオ」と改称)

1974年11月29日

36m道路下回遊地下歩道完成

1974年11月30日

地下街防災センター開設

1975年4月19日

横浜天理ビル連絡口開口

1975年4月21日

日本生命横浜西口ビル連絡口開口

1975年10月1日

沢渡駐車場開業(敷地面積3,526㎡、146台)

1981年8月1日

SYビル(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上7階・地下1階建、敷地面積555㎡(横浜地下街(株)持分293㎡)、延床面積3,288㎡)開業

2004年1月26日

地下街と横浜駅西口第1バスターミナルとを結ぶエレベーター4基を設置し、バリアフリー対策工事を完成

2004年3月31日

横浜岡田屋モアーズ地下1・2階「飲食街パティオ」の営業を廃止

2007年10月25日

横浜地下街第2駐車場(現・横浜駅西口第2駐車場)敷地内にオートバイパーキング(81台)を開業

*中央広場

2015年12月1日から「ホテル前広場」と改称。

4. 横浜駅西口周辺における賃貸業

◆西口商業施設の充実

相鉄グループの横浜駅西口商業施設の中心となる相鉄ジョイナスでは、顧客ニーズに応える施設とするため、継続的に館内各フロアの改装工事を行った。1988(昭和63)年10月25日には、4階「自然の広場」の改装が完成した。これは開業15周年を記念し、従来のテーマ「太陽と緑と水」に「風」を加えて、「妖精の風車」から人形が繰り出して時を告げるモニュメントや数多くの水車を配するなどして、イメージを刷新したものである。1990(平成2)年2月1日には、イメージアップのため、1階の「24時間通路」「23時通路」「三角広場」の改装に着手した。床面を磁器タイルから大理石に変更、天井照明を明るく、三角広場は天井を高くして開放感を高めるなどし、4月26日に完成した。また1991年10月24日には、地下1階食品街を全面改装し、11月15日には、地下2階と地下1階の間に、横浜市内で初となる中間水平部付きエスカレーターを設置した。

横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズの開業(1998年9月24日)に先立ち、1998年9月10日に地下1階のレディースブティックコーナーを改装、また8月28日に「デート広場」や1階三角広場の入口付近の外壁にゲート風のデザインを施すとともに壁や柱などをホテルと同じ色調に改装して、イメージの統一を図った。

一方、相鉄ジョイナスと接続する地下街ザ・ダイヤモンド(現・相鉄ジョイナス)では、1995年9月28日から防災設備等改善工事に着手した。1998年5月31日には、音声誘導装置、点字ブロックを新設するとともに、中央広場に新ランドマークとしてガラスアート「6連作・窓辺の語り部」(ガラスアーティスト・野口真里氏制作)を設置した。同年9月1日には、相鉄・高島屋共同ビル(現・相鉄ビル)との接続工事(2カ所)が完成、シェラトン第1連絡口、シェラトン第2連絡口が開通した。

2000年7月1日、横浜市西区みなとみらい地区に大型商業施設が相次いで開業し、集客競争が激化したことから、相鉄ジョイナスでは営業時間を物販店10時~21時、地下1・2階の飲食店11時~23時に、ザ・ダイヤモンドでは全店(食料品店は前年1999年11月1日から延長済み)の営業時間を10時~21時に延長した。

◆ダイヤモンドスポーツクラブ アトラス

横浜地下街(株)は、賃貸業に加え新たな事業展開を目指して、1987(昭和62)年5月13日沢渡ビル(鉄骨鉄筋コンクリート・鉄筋コンクリート造、地上3階・地下2階建、敷地面積3,777㎡、延床面積9,613㎡)を完成させ、同年6月1日、同ビル内に「ダイヤモンドスポーツクラブ アトラス」を開業した。同クラブは横浜駅から徒歩10分、スカッシュ・ラケットボールコート、インドアゴルフルーム、スイミングプール(25mプール、5コース)、アスレチックジム、スキューバダイビングプール(水深5m)およびランニングトラック(1周100m)を備え、当時としては日本最大級の規模と設備をもつスポーツクラブであった。その後、バブル崩壊で経済が低迷する



風車のモニュメントを加えた自然の広場



中間水平部付きエスカレーター



ガラスアート「6連作・窓辺の語り部」



ダイヤモンドスポーツクラブ アトラス



横浜クリエイションスクエア

なか、同クラブの経営が厳しいものとなったため、1997(平成9)年7月1日から(株)アトラスに経営を移管し、抜本の見直しを図った。

◆事務所ビルの取組み

相模鉄道(株)は、1994(平成6)年12月27日に、横浜駅西口の「相鉄鶴屋町ビル」の7・8階を学校法人岩崎学園に譲渡し、「相鉄岩崎学園ビル」と名称変更し、翌1995年9月28日に5・6階を譲渡した。

また横浜駅東口周辺で初の事務所ビルを、ヨコハマポートサイド地区内に複数の地権者(三井不動産(株)など)とともに開発し、1994年3月19日に「横浜クリエイションスクエア(YCS)」(鉄骨造、地上20階・地下1階建、敷地面積4,024㎡、延床面積2万1,172㎡)として完成させた。

5. 沿線地区における賃貸業

◆駅前商業ビルの充実

相模鉄道(株)は、三ツ境ショッピングプラザ「相鉄ライフ」の3階を1990(平成2)年3月に、1階を1994年4月に、2階を1997年3月にそれぞれ改装し、商業ビルとしての魅力の刷新を図った。

また同社は、1990年7月27日に二俣川駅に隣接してバスターミナルや旭区民文化センターを擁する二俣川駅北口共同ビル(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上7階・地下1階建、敷地面積3,496㎡、延床面積1万6,000㎡)を二俣川ショッピングプラザ「相鉄ライフ」として開業した。1991年12月4日にはさがみ野駅北口に相鉄さがみ野駐車場ビル(延床面積2,725㎡、125台)を、1993年4月21日にはいずみ中央駅に隣接して「そうてつローゼン」や泉区民文化センターを擁する相鉄いずみ中央ビル(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上6階建、敷地面積1万471㎡、延床面積1万9,767㎡)をいずみ中央ショッピングプラザ「相鉄ライフ」として、それぞれ開業した。

大和駅に隣接し、そうてつローゼン大和店が入居していた相鉄大和ビル(1959<昭和34>年開業)は、1988年9月1日、大和駅周辺連続立体交差工事に伴い解体されたが、立体交差工事完成後、相模鉄道(株)と小田急電鉄(株)が共同で、地上5階建ての商業ビル「大和駅共同ビル」(鉄骨造、敷地面積1,049㎡、延床面積4,087㎡、うち相模鉄道(株)所有面積2,681㎡)を建設した。同ビルと、小田急電鉄(株)が建設した「大和駅地下店舗」を合わせ、1996年4月26日に「PROSS^{プロス}」が開業した。食料品・衣料品・書籍・飲食など26店が出店し、駅前の活性化を担う新拠点となった。なお「PROSS」とは、PROMISEとCROSSを合成した造語である。

JR根岸線港南台駅前では、日本市街地開発^{*}(株)が、相鉄ストア(現・そうてつローゼ



二俣川ショッピングプラザ「相鉄ライフ」



PROSS

* 日本市街地開発(株)

創立以来の主な施策は、以下のとおり。
 1966年12月27日
 設立
 1972年9月11日
 横浜市長あておよび神奈川県知事あての「公有水面埋立免許申請書」を取下げ
 1973年1月16日
 相鉄グループ入り
 1974年9月28日
 仮設店舗「港南台マート」開業(1976年4月13日閉店)
 1976年4月14日
 港南台センター「パース」(第1期)開店
 1982年2月22日
 駐車場ビル(延床面積1万54㎡、630台)開業
 1983年10月1日
 港南台センター「パース」(第2期)開業、横浜高島屋港南台店開店
 1987年9月15日
 港南台シネサロン(PART I・PART II、82席)開館
 1994年9月19日
 港南台214ビル完成



港南台センター「パーズ」

* 港南台214ビル

横浜市、(社)横浜市病院協会(現・(公社)横浜市病院協会)、(財)郵政互助会(現・(一財)郵政福祉)、横浜南農業協同組合(現・横浜農業協同組合)、日本市街地開発(株)の5者による区分所有ビル。現在、(株)相鉄アーバンクリエイティブ持分73.2%。駐車場205台。



クイント星川



アルコット二俣川

ン)港南台店および横浜高島屋港南台店(現・高島屋港南台店)を核店舗とする港南台センター「パーズ」(現・港南台パーズ)を運営していたが、同社は1987年9月15日、「パーズ」内に小型映画館「シネサロン」を開館した。1994年9月19日には、隣接地に商業・事務所ビル「港南台214ビル」(鉄筋コンクリート・鉄骨造、地上5階・地下1階建、敷地面積6,362㎡、延床面積2万9,076㎡)を完成させ、翌1995年2月14日に「シネサロン」を同ビルに移転し、引き続きパーズの活性化工事に着手、同年10月26日に完成した。

◆ 賃貸ビルの増加と駅前再開発

相模鉄道(株)は1988(昭和63)年12月1日に相鉄山手台ビル(鉄骨造、地上2階建、敷地面積2,120㎡、延床面積706㎡、現・相鉄山手台第1ビル)を完成、DIYホームセンターを運営する(株)アクト(現・(株)サンドラッグ)に賃貸した。また、1989(平成元)年7月20日に相鉄杉久保ビル(鉄骨造、地上1階建、敷地面積199㎡、延床面積100㎡)を完成させ、金融機関などに賃貸した(2013年6月28日売却)。

1989年8月14日には、星川駅南口の旧・古河電池工場跡地開発計画「横浜ミッドタウンプロジェクト」の商業・業務エリアに星川SFビル(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上7階・地下1階建、敷地面積2,000㎡、延床面積6,387㎡)が完成した。1階から4階には医療機関と飲食店など19店が入居し「クイント星川」として8月25日に開業、5階から7階は古河電池(株)の事務所となった。同ビル隣接地には2000年11月8日、星川相鉄・三井共同ビル(鉄骨造、地上2階建、敷地面積4,958㎡、延床面積2,800㎡、相模鉄道(株)持分50%・三井不動産(株)持分50%)が完成し、スーパーマーケットが出店した。

相模鉄道(株)は、1990年4月18日、かしわ台住宅地内に相鉄かしわ台ビル(2棟。鉄骨造・一部鉄筋コンクリート造、地上2階建、敷地面積2,494㎡、延床面積748㎡・209㎡)を完成し、(株)アクトと飲食店に賃貸した。また、1991年3月25日に相鉄山手台第2ビル(鉄筋コンクリート造、地上2階建、敷地面積1,322㎡、延床面積951㎡)、1992年9月14日に相鉄山手台第3ビル(鉄骨造、地上2階建、敷地面積1,272㎡、延床面積694㎡)、9月14日に相鉄山手台第4ビル(鉄骨造、地上2階建、敷地面積967㎡、延床面積1,037㎡)、10月6日に相鉄山手台第5ビル(鉄骨造、地上2階建、敷地面積1,983㎡、延床面積1,018㎡)を、いずれも山手台住宅地内の横浜市都市計画道路中田・さちが丘線沿いに完成させ、スポーツクラブ、物販店、(株)アクト、相鉄日産神奈川販売(株)に賃貸した。1995年8月10日には緑園都市住宅地内の中田・さちが丘線沿いに相鉄緑園都市ビル(鉄骨造、地上2階建、敷地面積1,595㎡、延床面積830㎡。現・相鉄緑園都市第1ビル)を完成、物販店に賃貸した。また、2001年10月17日には相鉄緑園都市第2ビル(鉄骨造、地上1階建、敷地面積969㎡、延床面積517㎡)を完成させ、リサイクルショップへ賃貸した。

一方相鉄不動産(株)も、1990年2月23日に相鉄不動産南万騎が原ビル(鉄筋コンクリート造、地上4階・地下1階建、敷地面積452㎡、延床面積1,665㎡、現・相鉄南万騎が原第2ビル)を完成させ、日産不動産(株)(現・日産ネットワークホールディングス(株))に賃貸した。なお同ビルは1993年3月31日、相模鉄道(株)に譲渡された。

二俣川駅北口では、相模鉄道(株)と地元地権者で構成する二俣川駅北口地区市街地再開発組合が1988年12月20日に都市計画決定を受けた複合ビル「アルコット二俣川」(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上14階・地下2階建、敷地面積6,033㎡、延床面積4万1,459㎡のうち所有面積2万2,400㎡)が1996年4月18日に開業した。1階から5階は核テナントとなるスーパーマーケットに賃貸され、6階から14階については相模鉄

道(株)が集合住宅「グレーシア二俣川」(専有面積51㎡~90㎡、価格3,500万円~7,500万円台、120戸)として分譲した。同ビルと二俣川駅、二俣川ショッピングプラザ「相鉄ライフ」はペデストリアンデッキで結ばれ、アルコット二俣川2階入口にはからくり時計が設置された。

瀬谷駅北口では、1988年10月5日に横浜市が施行者となる瀬谷駅北地区土地区画整理事業が都市計画決定され、相模鉄道(株)は地区内で交通広場を整備し、広場上部に相鉄瀬谷駐車場ビル(延床面積1万1,323㎡、348台)を1998年12月2日に開業した。また同年11月18日、(株)日鉄ライフ(現・新日鉄興和不動産(株))とともに瀬谷駅北口共同ビル(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上9階建、敷地面積625㎡)を完成させ、相模鉄道(株)は1・2階を金融機関、書店、飲食店に賃貸、(株)日鉄ライフは3階以上を集合住宅として分譲した。

駅前以外での開発も行われた。相模鉄道(株)は、横浜市神奈川区の新横浜通り沿いにあった相模鉄道(株)の石油配送所、不動産営業本部所有の土地など4,302㎡に、2000年3月17日、相鉄片倉第1ビル・第2ビルを完成させた。第1ビル(鉄骨造、地上1階建、延床面積260㎡)は飲食店に賃貸し、第2ビル(鉄骨造、地上2階建、延床面積1,984㎡)には4月7日、「TSUTAYA片倉町店」が出店した。

2004年9月17日には、上星川駅に隣接していた相模鉄道(株)の独身女子寮「上星川わかば寮」跡地に相鉄上星川ビル(鉄骨造、地上3階建、敷地面積1,978㎡、延床面積1,984㎡)を完成させ、コンビニエンスストアと飲食店に賃貸した。

◆ビルメンテナンス業の充実

相鉄企業(株)は、マンション管理業務、下水道処理施設管理業務、一般建設業、設備工事業などに進出、また相模鉄道(株)による賃貸ビルや集合住宅の開発に伴い、管理建物数は大幅に増加した。1986(昭和61)年8月20日には中高層分譲共同住宅管理業者に登録、1988年3月29日に下水道処理施設維持管理業者に登録した。同年11月16日に東京営業所、1990(平成2)年10月16日に千葉営業所を設置し、1993年10月1日には、両営業所を統合して、首都圏営業所とした。また、1992年9月28日には、海老名市河原口に集合住宅「シティパル」(敷地面積822㎡、専有面積58㎡、間取り3DK、19戸)を完成させ、賃貸業にも進出した。

1994年10月1日には医療関連サービスマーク認定を取得し、医療施設の管理業務へ進出した。また1995年7月1日に県央営業所を設置して、神奈川県下の市場深耕に力を入れた。同年10月25日には特定建設業(建築工事業、塗装工事業、防水工事業、内装仕上工事業)許可を取得した。1998年5月15日に病院清掃サービス分野においてISO9002、2007年3月9日に下水道処理施設の管理・保守点検でISO14001の認証を取得するなど、管理の質向上にも継続的に取り組んだ。

第5節 よりよい企業グループを目指して

1. 情報システム導入による業務効率化

業務へのコンピュータの活用は1960年代に開始されたが、当初は汎用大型コンピュータと専用端末を中心とするシステムであった。1988(昭和63)年8月8日に使用開始された相鉄本社ビルでは、電算機室に停電時などにも安定的に電源が供給されるCVCF設備、ハロゲン化物消火設備、空調設備などの特別仕様工事が施された。



相鉄企業(株)のビルメンテナンス業

*相鉄企業(株)の取組み

以下のような施策を展開した。

- 1964年10月
東京オリンピック代々木選手村の施設管理業務受注に参加
- 1973年10月1日
「相鉄コープ南瀬谷」の団地管理業務を受注し、マンション管理業務に進出
- 1977年12月
「相模川流域下水道左岸処理場」管理業務を受注し、下水道処理施設管理業務に進出
- 1978年7月6日
一般建設業(電気工事業、管工事業、消防施設工事業)許可取得
- 1981年4月
「相鉄コープ南瀬谷」の設備施工管理業務を受注し、設備工事業に進出
- 1982年3月27日
第1回QC発表大会実施
- 1983年3月25日
警備業法にもとづく認定取得
- 1984年10月6日
建築物環境衛生一般管理業登録
- 1984年11月21日
建築物飲料水貯水槽清掃業登録
- 1986年7月1日
特定労働者派遣業登録



相鉄本社ビル電算機室

***LAN**

Local Area Networkの略。導入時には有線LANが標準であった。



会議室予約システム

***OCR**

光学式文字読取装置。所定の「OCR用紙」に記入した内容を専用機で読取りデータ化した。

***相鉄賞**

毎年最大5団体に贈呈(選考や贈呈式などは神奈川の教育を推進する県民会議に一任)。1992年から賞金総額を200万円に変更。



相鉄文化会館



相鉄ギャラリー



相鉄ジョイナスでの「ローゼン母の日絵画展」入選作品展示

ここに相模鉄道(株)と相鉄ローゼン(株)がそれぞれホストコンピュータや端末機を設置して共同利用し、相模鉄道(株)は主に人事・経理関係業務を、相鉄ローゼン(株)は主に販売・商品仕入れ・購買関係業務を行った。1992(平成4)年4月には相鉄不動産(株)のホストコンピュータと接続して、同社の経理システムの管理を相模鉄道(株)が受託し、効率化を図った。

1990年代後半には、PC(パーソナルコンピュータ)の普及に伴い、相鉄グループでもPC導入とオンライン処理化が進められた。1995年5月、相模鉄道(株)は相鉄本社ビル内へのLAN回線敷設を開始し、同年7月にはこれを使用した会議室予約システムを導入した。同社では1997年4月からはLANによる経理伝票入力システムも稼働し、これまでOCRで行っていた支払票や収入票などの起票・読取りを、PC52台とサーバ2台で構成したネットワークに置き換えて効率化を図った。

1998年12月以降、相模鉄道(株)は本社内の係長以上と各部庶務担当者へのPC貸与を進め、グループウェア(日立製Groupmax)を本格的に導入して、電子メール、電子掲示板、スケジューラーの利用を開始した。翌1999年8月には本社内の全社員へのPC導入および社内LANへの接続が完了した。2000年7月には「実施書システム」を本稼働し、実施書の作成・立案から審議・決裁・保存までがPC上で可能となり、稟議業務が効率化・迅速化された。

2. 文化・スポーツ活動支援と横浜博覧会

相鉄グループは、「総合サービス企業集団」を目指すなか、より幅広く相鉄線沿線住民の暮らしとの接点をもつこととなった。1980年代後半にメセナ(企業による文化・芸術・スポーツ活動支援)の重要性が説かれ、1990年代に環境問題やバリアフリーへの企業の取組みが注目されるようになると、事業活動そのものによる地域社会への貢献に加え、これらの活動も展開するようになった。

相模鉄道(株)は1987(昭和62)年11月18日、創立70周年を記念して、「神奈川の教育を推進する県民会議」に「相鉄賞」を新設した。これは、同会議が実践するふれあい実践活動事業などで顕著な成果を上げた団体に、総額100万円の賞金を贈呈し、表彰するものであった。1990(平成2)年2月1日には、同じく創立70周年記念事業として、緑園都市住宅地内に相鉄文化会館(鉄骨鉄筋コンクリート造、地上4階・地下1階建、敷地面積2,000㎡、延床面積3,804㎡)を開館した。建築家・原広司氏の設計によるユニークな外観の同会館内には、相模鉄道(株)などの社員研修施設と相模鉄道緑園都市教習所のほか、芸術を愛好する市民が利用できる「相鉄ギャラリー」と放送収録ができる「相鉄ビデオステーション」を併設した。相鉄ギャラリーでは企画展示を行うほか、一般公募による個展「相鉄奨励展」を開催した(2014年3月30日に閉館)。一方、1989年11月22日から25日まで、女性アマチュア棋士による世界初の国際大会となる「'89世界女流アマ選抜囲碁大会・ヨコハマ相鉄杯」に協賛、翌年以降は(財)日本棋院との共催として「ヨコハマ相鉄杯世界女流アマ囲碁選手権」と改称、1998年までの7年間開催して、認知度と好感度の向上を図るとともに囲碁の普及に貢献した。

相鉄ローゼン(株)では1968年から2000年まで、「母の日」に合わせ、「ローゼン母の日絵画展」を開催した。これは、子どもたちから募集した絵画のうち、優秀作品をそうてつローゼン店内、相鉄ジョイナスなどに展示するもので、最大で5万2,263名の応募があった。

日本市街地開発(株)では1990年11月3日、「第1回バーズ杯争奪港南区少年野球大会」を開催した。以後毎年秋に開催、第4回大会からは磯子区、栄区が加わり、

2017年の第28回大会では51チームの参加があった。

1989年3月25日から10月1日に、横浜市制100周年・横浜港開港130周年を記念する横浜博覧会「YES'89」が、みなとみらい21地区を会場として開催された。相鉄グループでは、博覧会の円滑な運営や入場者数増に貢献するため、相模鉄道(株)が駅窓口でのチケット販売(1988年1月20日から)、会場内輸送機関であるケーブル牽引式軌道交通システム「SK」を運行する横浜エスケイ^{*}(株)設立への参加、会場へのシャトルバス(横浜駅西口～横浜博覧会会場)運行(横浜市交通局、神奈川中央交通(株)、東京急行電鉄(株)、京浜急行電鉄(株)、江ノ島電鉄(株)と共同)、会場内の噴水施設「祭りの噴水HIT361」設置への参加などを行ったほか、横浜情報ネットワーク(株)が会場内への情報検索端末「タウンキッス」の設置、相鉄企業(株)が会場での警備業務を受託した。また相模鉄道(株)は旧・相鉄ビルへ同博覧会のPRボードを掲出した。

*** パース杯争奪港南区少年野球大会**
現・パース旗争奪少年野球大会。1999年以降は(株)相鉄ビルマネジメント主催。

*** 横浜エスケイ(株)**
1987年10月16日、相模鉄道(株)、東京急行電鉄(株)、京浜急行電鉄(株)、日揮(株)と共同で設立。出資比率20%。代表取締役齋藤昌訓(東京急行電鉄専務取締役)。



横浜博覧会場内の交通システム「SK」



解体工事を控えた旧・相鉄ビルに設置した「YES'89」PRボード